

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論：『資本論』第1巻第24章第7節を巡って(上)

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4474760>

出版情報：経済学研究. 42 (1/6), pp.337-388, 1977-05-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論

——『資本論』第1巻第24章第7節を巡って——（上）

福 留 久 大

- 一 緒言
- 二 素材
- 三 学説 （以上、本号）
- 四 検討
- 五 結語

—

マルクス『資本論』第1巻「資本の生産過程」第7篇「資本の蓄積過程」第24章「いわゆる本源的蓄積」第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を検討してみようと思う。

その検討に先立って、『資本論』全体にたいする筆者の感想を簡単に述べておくことが、無用の誤解を避けるために、有益だろう。尤も、『資本論』全体にたいする筆者の感想といっても、特別に異色のもの、出色のものがある訳ではない。ただ、『資本論』を通読したり、問題に応じてそのあちこちの部分を読んだり、研究書や解説書のいくつかを参看したり、そういうごく通常の経験を通じて、平凡ながらも筆者なりの感想は、形成される。そういう『資本論』全体についての感想は、いささか月並めくが、理論の奥深さ、思考の雄大さ、論理の強靱さを、読み返すたびに強く印象づけられる、というほかない。周知のようにマルクスの浩瀚な著作は、時間的にいえば無文字時代から近代の

機械文明までを対象とし、地理的にみても西欧社会だけにとどまらずロシア、インド、中国など世界の多くの地域を含んでいる。部門別にいても経済問題だけに限定されているのではないことは、いうまでもない。そういう多岐にわたる種々のマルクス仕事については、なお特別の勉強を積んでいない筆者などは、評価の限りではない。しかし、多少とも勉強した『資本論』を中核とするマルクスの資本主義論については、その全体としての整合性、大筋における正しさは揺ぎないものがあると思う。

ところで、『資本論』全体に関する感想が実感を伴って、上述のように固まってくる過程は、とりもなおさず、『資本論』の細部に関する疑問が次第に明確な形をとって生じてくる過程でもあった。「細部に関する疑問」というとき、ふたつの点についての判断が問題となりうる。ひとつには、『資本論』のある部分が全体の論理構成からみて基幹部分ではなく技藝部分であり、その意味で「細部」であるとする判断である。ふたつには、その部分における論理展開が全体にわたる論理展開にたいして逸脱しており平仄が合わないというところから、そこを「疑問」だとする判断である。したがって、「細部に関する疑問」の形成は、このふたつの判断の基盤を成すものとしての、『資本論』そのものの全体の理論、根本の思考、大筋の論理など

についての理解の進展と、表裏一体の関係にあることになる。換言すれば、『資本論』の全体の正当を確信することが、同時に、細部の欠陥を実感することになる、(ここでは、逆もまた真)——そういう一見逆説的な関係が存在する。

『資本論』について、その大筋の正しさに信を置くとともに、その部分的間違いと考えられるものを安んじて問題にしようという筆者の実感の形成は、無論のこと、独力によるものではない。多くの諸家の見解の筆者なりの取捨選択の結果によるものであることは、いうまでもない。しかし、そこにおいて得た感想は、小さく拙ないものではあっても自分のものであることにはちがいない。そういう筆者なりの実感に基いて、『資本論』への接し方において、次のような先達の姿勢を、「導きの糸」としたいと考えている。

「『資本論』をイデオロギーの書として、これを如何なる批判に対しても擁護しようというのは、これを読みもしないで排撃するのと同様に、『資本論』の偉大なる科学的業績を現代に生かすものではないと思っている。『資本論』における問題点は問題点として明らかにしてこそ、『資本論』に学ぶこともできるのである。また古典経済学を徹底的に批判して確立されたマルクス経済学を措いて、経済学の基本的概念は得られるものではない。『資本論』は古い、などといって済めるものではないのである。

『資本論』を科学の書として、できうる限りこれに学ぶというのが、私の念願である¹⁾。」

『資本論』における問題点は問題点として明らかにしてこそ、『資本論』に学ぶこともできる、ということであって、つまり、『資本論』の「細部に関する疑問」を揺がせにすることなく究明することを通じて、『資本論』の全体に関する

確信をより強化しようという次第であろう。そういう姿勢で以て、以下『資本論』の「細部に関する疑問」のひとつについて考えてみたいと思う。

ここで採り上げたいのは、冒頭にも記したように『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」である。『資本論』第1巻の終りに近いこの部分——この節の後には第25章「近代植民理論」があるだけである——は、3頁でいどの短い文章であるが、マルクスはそのなかに、資本主義の発生、発展、消滅という壮大なドラマを盛り込んでいる。そして、一般に問題とされるのは、そのなかに展開されている以下のような趣旨である。つまり、資本主義社会の発展にともなって、社会の物質的生産力は、その生産関係もしくは所有関係と矛盾撞着することになる。その矛盾は一方的に労働者階級に転嫁され、労働者階級の困窮は時とともに高まっていく。その高まりが頂点まで達した時、「資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」

このような趣旨は、『資本論』第1巻(1867年刊)より8年前に刊行された『経済学批判』(1859年刊)の「序言」において述べられている、いわゆる唯物史観の公式に、照応しているように見える。おそらくは、そういう事情も重なって、この部分は、社会主義を志向する人々によって、資本主義の消滅(ないし打倒)と社会主義の到来(ないし樹立)の必然性をマルクスが示したものとして、肯定的に引用されることが多い。(典型的な一例を挙げると、向坂逸郎『マルクス経済学の基本問題』の中の「資本主義的蓄積の一般的法則——いわゆる窮乏化法則について——」²⁾)

逆に、社会主義を忌避する側からも、マルクスがこの第1巻第24章第7節で説いた労働者階級の困窮の深化、それによって惹起される「収奪者が収奪される」事態の出現という命題は、『資本論』刊行以降から20世紀にかけての資本主義社会の事実と合致しない、という形で、批評ないし非難されることが、少なくない。(これについても、一例を指摘すると、小泉信三『共產主義批判の常識』中の「マルクシズム概観」がある³⁾。)

そういう風に支持し擁護するにしろ、論難し排撃するにしろ、取扱われる機会の大変に多い一節である。そして支持派にしろ、排撃派にしろ、この一節を、マルクスの学説の大筋を集約したもの、『資本論』の理論の基幹的要素が貫徹したものとして、受取っているようである。しかしながら、仔細にこの一節を検討してみると、『資本論』の理論の全体、思考の根本、論理の大筋からみて、ここには論理の混乱や飛躍が少なくないことに気付かされる。その意味では、この一節、必ずしも、マルクスの学説の大筋の結晶したものではないこと、『資本論』の理論の基幹的部分の延長上に位置するものでないことが、判明するように、筆者には考えられるのである。

論理の混乱や飛躍についての詳細は、後に譲ることにして、いま平明な一例を挙げると、次のようなことがある。先に、この一節の叙述が、いわゆる唯物史観の公式に照応しているように見える、と書いたが、両者を多少入念に比較検討してみると、『経済学批判』『序言』中のいわゆる唯物史観の公式にあっては、生産力 Produktivkraft と生産関係 Produktionsverhältnis との矛盾というのが重要な概念として基軸的位置を占めている⁴⁾。それに対して、

『資本論』第1巻第24章第7節においては、生産様式 Produktionsweise (生産方法とも訳される) という言葉が持ち出され、あるところではそれが「生産力」と対立せしめられ、別のところでは「生産関係」と矛盾するものとされることになっている。そして生産力と生産関係の矛盾(あるいは対応)の関係については明確な論述が与えられないままである、ことが判るのである⁵⁾。

このような種類の「細部に関する疑問」の検討作業を通じて、この一節が、『資本論』の理論の全体、思考の根本、論理の大筋に背馳するものを含むことを証明し、この一節を、正しく位置づけるにはどのような理論操作がなされるべきかを解明する——これが、この小稿の課題である。

ところで、そういう仕事は、実は、宇野弘蔵によって、「社会主義と経済学」(『社会科学の根本問題』)を中心とする論考によって、既に実質的に成されている。しかしながら、宇野の論考については、一方では、「UNO理論というのは日本人の私にとってすら難解な不可解な文章で綴られている」(森嶋通夫⁶⁾)とか、あるいは「学生と宇野さんの経済原論の読書会をやった。難解。サジを投げたことがある」(高橋正雄⁷⁾)と言われ、他方では「宇野理論は本質的に論理的である。なるほどその論理は、社会科学の神髄をきわめた高度なものであるが、それについてゆく努力を怠りさえしなければ必ず理解できるはずである」(馬場宏二⁸⁾)と言われるように、著しい毀誉褒貶が交錯している。筆者は、基本的に後者の評価に賛成するが、前者の評価を的はずれとして一蹴するのも躊躇を覚える。特に、自らの経験を顧るとき、宇野の文章を「難解」と感じた日々の記憶は、今に

生々しい。先の論考「社会主義と経済学」についても、大体において理解しえたと思ひ、理解しえた限りではそこでの宇野の見解に賛成しうるのであるが、その論考を最初に手にしたときには「難解」な文章という印象が強く、文意を理解しえた部分より理解しえなかった部分が多かった。時期を経て閲読の回数を重ねるにつれて、前者的評価から後者的評価に重心の推移が生じたのではあるが、いまなお完全に理解しえたとの自信はない。

そういう事情を考慮してみると、マルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を分析した宇野の「社会主義と経済学」について、筆者が理解しえたと思うところを自己流に紹介するのだけでも、多少の意義は存在するように考えられる。さらに、マルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」そのものが、大きい問題を包蔵しているにもかかわらず、ここで展開されている論理そのものの分析はほとんどなされていない（解釈は数多くあるが）という事情を加味してみると、改めてこの第24章第7節を検討することの意義は、小さくないと考えられるのである。

そこで、具体的手続きは、こうなる。まずひとつには、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」に関する宇野の分析を、他の論者の評価との比較において取り纏めること（「三．学説」とした部分）。ふたつめには、宇野の分析を手掛りとしつつ、しかし基本的には、『資本論』を中心とするマルクス自らの論述のなかに「資本主義的蓄積の歴史的傾向」における概念と論理をおいて、マルクスをしてマルクスを批判せしめる方法をできるだけ守りつつ、この一節の内包する問題点の検討を試みる（四．「検討」とした部分）。

- 1) 宇野弘蔵『経済原論』、1964年刊、序 iii—iv。頁
- 2) 向坂逸郎『マルクス 経済学の 基本問題』、1962年刊、331—361頁。
- 3) 小泉信三『共産主義批判の常識』、(『小泉信三全集』第10巻、1967年刊) 90—91頁。
- 4) Karl Marx ; *Zur Kritik Der Politischen Ökonomie*, 1859. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 13, 1961, S. 8—9.
(邦訳、『マルクス・エンゲルス全集』、第13巻、1964年刊、6—7頁)。
- 5) Karl Marx ; *Das Kapital*, Bd. 1, 1867. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 23, 1962, S. 789—791.
(邦訳、『マルクス・エンゲルス全集』、第23巻、第2分冊、1965年刊、993—6頁)。本文340—345頁に再録されている。
- 6) 森嶋通夫「ロンドンからみた日本の経済学」(『エコノミスト』臨時増刊、1975年11月10日号、20—28頁) 23頁。
- 7) 高橋正雄「宇野経済学が残した課題」(『中央公論』1977年5月号、82頁)。
- 8) 馬場宏二「宇野理論の含蓄」(『宇野弘蔵著作集』第9巻、月報、1974年6月、2—4頁) 2頁。

二

資本主義的蓄積の歴史的傾向

資本の本源蓄積、すなわち その歴史的生成は、いかなることに帰着するか？ それが奴隷と農奴の賃銀労働者への直接転化、したがって単なる形態転換でないかぎり、直接生産者の収奪、すなわち自己の労働に基づく私有の解体を意味するにほかならない。

社会的、集团的所有にたいする対立物としての私有は、労働手段と労働の外的諸条件とが、私人に属するばあいのみ成立する。しかし、この私人が労働者であるか、非労働者であるかにしたがって、私有もまた異なる性格をもつ。一見私有の呈する無限の濃淡は、この両極のあいだに存する中間状態を反映するものにすぎない。

い。

労働者の自己の生産手段にたいする私有は、小経営の基礎であり、小経営は、社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のためには、一つの必要条件である。たしかに、この生産様式は、奴隷制度、農奴制度、その他の隷属的諸関係の内部にも存在しはする。しかし、それが繁栄し、全精力を発揮し、適切な典型的形態を獲得するのは、労働者が彼自身の扱う労働諸条件の自由な私有者であるばあい、すなわち、農民はその耕す耕地の、手工業者は彼が老練の腕をもって振う用具の、自由な私有者であるばあいのみである。

この生産様式は、土地と、その他の生産手段の分散を前提する。それは、生産手段の集積を排除するとともに、同一生産過程の内部における協業と分業、自然に対する社会的支配と規制、社会的生産諸力の自由な発展をも、排除する。それは、生産と社会の狭隘な自然発生的な限度とのみ、調和する。これを永遠化しようと欲するのは、ペクルルが正しく言っているように、「一般的平凡を命令する」ものであろう。一定の高度に達すれば、それは、それ自身の破壊の物質的手段を産みだす。この瞬間から、社会の胎内では、この生産様式を桎梏と感ずる力と熱情とが動きだす。この生産様式は破壊されねばならず、破壊される。その破壊、個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化、したがって、多数な人口の矮小所有の、少数の人の大量所有への転化、したがって、民衆の大群からの土地と生活手段と労働用具の収奪、この怖るべき苛酷な民衆収奪が、資本の前史をなすのである。それは、一連の暴力的方法を包括するものであって、われわれは、そのうちの画期的なもののみを、資本の本源

蓄積の方法として、考察したのである。直接生産者の収奪は、全く仮借するところのない野蛮をもって、もっとも陋劣、醜悪、卑怯な憎むべき激情の衝動の下に、遂行される。自己の労働によって得られた、いわば個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有は、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有によって駆逐される。*

この転形過程が、旧社会を深さにおいても広さにおいても充分に分解してしまえば、すなわち、労働者がプロレタリアに、その労働諸条件が資本に転化されれば、資本主義的生产様式が自己の足で立つにいたれば、労働のさらにそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の、社会的に利用される、したがって共同的な生産手段への、さらにそれ以上の転化、したがって、私有者のさらにそれ以上の収奪は、一つの新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。

この収奪は、資本主義的生产自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多くの資本家を滅ぼす。この集中とならんで、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪とならんで、ますます大規模となる労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的应用、土地の計画的利用、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節約、世界市場網への世界各国国民の組入れ、およびそれとともに資本主義体制の国際的性格が、発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増

大するのであるが、また、たえず膨脹しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それとともに、かつそのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。

資本主義的生産様式から生ずる資本主義的領有様式は、したがって資本主義的私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を産み出す。それは否定の否定である。この否定は、私有を再興するのではないが、しかししたしかに、資本主義時代の成果を基礎とする、すなわち、協同と土地および労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする、個別的私有を再興する。

言うまでもなく、個人の自己労働にもとづく分散的私有の資本主義的私有への転化は、事実上すでに社会的生産経営に立脚する資本主義的所有の社会的所有への転化に比すれば、比較にならないほど長く、苛酷で、困難な過程である。前のばあいには、少数の篡奪者による民衆の収奪が行なわれたのであるが、後のばあいには、民衆による少数の篡奪者の収奪が行なわれるのである。***

(原註) * 「われわれは、社会の全く新たな事情の下にある。……われわれは、あらゆる種類の所有を、あらゆる種類の労働から分離する傾向にある」(シスモンディ『新経済学原理』第2巻, 434頁。)

** 「ブルジョアジーをその無意志にして無抵抗な担当者とする産業の進歩は、競争による労働者の孤立化に代えるに、結合による彼らの革命的団結をもってする。したがって、大工業の発展とともに、ブルジョアジーがそのうえで生産しかつ生産物を領有する基礎自体が、ブルジョアジーの足もとから奪い去られる。ブルジョアジーは、何よりもまずそれ自身の墓掘り人を生産する。ブルジョアジーの没落とプロレタリアートの勝利とは、等しく不可避である。……今日ブルジョアジーに対立するすべての階級のうちに、現実に革命的な階級は、ただプロレタリアートのみである。自余の諸階級は、大工業の発展とともに衰頹し、滅亡するが、プロレタリアートは、大工業のもっとも固有な産物である。中産階級、小工業者、小商人、手工業者、農民、彼らはすべて、中産階級としての彼らの存在を没落から守るために、ブルジョアジーと抗争する。……彼らは反動的である。歴史の車輪を逆転させようとするものであるからである。」カール・マルクスおよびフリードリヒ・エンゲルス『共産党宣言』ロンドン, 1848年……。

(訳註) 訳文は、向坂逸郎訳、『資本論』岩波文庫版、第4分冊、412—416頁による。ただし、第7パラグラフの末尾は「つくりだす」を「再興する」に改めた。原文 *wieder herstellen* の意味を、より直接的に示すためである。この訳語の問題については平田清明『経済学と歴史認識』, 475頁, 482—492頁, 林直道『史的唯物論と経済学』(下), 179頁を参照のこと。ただそこで、この部分を邦訳書が「生みだす」(長谷部訳)、「つくり出す」(向坂訳, 岡崎訳)としているのを「誤訳」, 「初步的な語謬」(平田)と評するのは、断定にすぎないか。Diese stellt nicht das Privateigentum wieder her, wohl aber das individuelle Eigentum と *wieder herstellen* の目的語が二つあるときに、「私的所有を再建するわけではないが、個人的所有を生みだす」(長谷部)、「私有を再興するのではないが、個別的所有をつくり出す」(向坂)、「私有を再建しはしないが、個人的所有をつくりだす」(岡崎)というように、同一動詞の近接個所での重複使用を避けるのは、日本語の感覚として、むしろ正常なことといえるのではないかと思う。

Geschichtliche Tendenz der kapitalistischen Akkumulation₍₁₎

Worauf kommt die ursprüngliche Akkumulation des Kapitals, d. h. seine historische Genesis, hinaus? Soweit sie nicht unmittelbare Verwandlung von Sklaven und Leibeigenen in Lohnarbeiter, also bloßer Formwechsel ist, bedeutet sie nur die Expropriation der unmittelbaren Produzenten, d. h. die Auflösung des auf eigener Arbeit beruhenden Privateigentums.

Privateigentum, als Gegensatz zum gesellschaftlichen, kollektiven Eigentum, besteht nur da, wo die Arbeitsmittel und die äußeren Bedingungen der Arbeit Privatleuten gehören. Je nachdem aber diese Privatleute die Arbeiter oder die Nichtarbeiter sind, hat auch das Privateigentum einen andern Charakter. Die unendlichen Schattierungen, die es auf den ersten Blick darbietet, spiegeln nur die zwischen diesen beiden Extremen liegenden Zwischenzustände wider.₍₂₎

Das Privateigentum des Arbeiters an seinen Produktionsmitteln ist die Grundlage des Kleinbetriebs, der Kleinbetrieb eine notwendige Bedingung für die Entwicklung der gesellschaftlichen Produktion und der freien Individualität des Arbeiters selbst. Allerdings existiert diese Produktionsweise auch innerhalb der Sklaverei, Leibeigenschaft und anderer Abhängigkeitsverhältnisse. Aber sie blüht nur, schnell nur ihre ganze Energie, erobert nur die adäquate klassische Form, wo der Arbeiter freier Privateigentümer seiner von ihm selbst gehandhabten Arbeitsbedingungen ist, der Bauer des Ackers, den er bestellt, der Handwerker des Instruments, worauf₍₃₎ er als Virtuose spielt.

Diese Produktionsweise unterstellt Zersplitterung des Bodens und der übrigen Produktionsmittel. Wie die Konzentration der letzteren, so schließt sie auch die Kooperation,₍₄₎ Teilung der Arbeit innerhalb derselben Produktionsprozesse, gesellschaftliche Beherrschung und Regelung der Natur, freie₍₅₎ Entwicklung der gesellschaftlichen Produktivkräfte aus. Sie ist nur verträglich mit engen naturwüchsigen Schranken der Produktion und der Gesellschaft. Sie verewigen wollen hieße, wie Pecqueur mit Recht sagt, „die allgemeine Mittelmäßigkeit dekretieren“.₍₆₎ Auf einem gewissen Höhegrad bringt sie die materiellen Mittel ihrer eignen Vernichtung zur Welt. Von diesem Augenblick regen sich Kräfte und Leidenschaften im Gesellschaftsschoße, welche sich von ihr gefesselt fühlen. Sie muß vernichtet werden, sie wird vernichtet. Ihre Vernichtung, die Verwandlung der individuellen und zersplitterten Produktionsmittel in gesellschaftlich konzentrierte, daher des zwerghaften Eigentums vieler in das massenhafte Eigentum weniger, daher die Expropriation der großen Volksmasse von Grund und Boden und Lebensmitteln und Arbeitsinstrumenten, diese furchtbare und schwierige Expropriation der Volksmasse bildet die Vorgeschichte des Kapitals. Sie umfaßt eine Reihe gewaltsamer Methoden, wovon wir nur die epochemachenden als Methoden der ursprünglichen Akkumulation des Kapitals Revue passieren ließen. Die Expropriation der unmittelbaren Produzenten wird mit schonungslosestem Vandalismus und unter dem Trieb der infamsten, schmutzigsten, kleinlichst gehässigsten

Leidenschaften vollbracht. Das selbsterarbeitete, sozusagen auf Verwachsung des einzelnen,⁽⁷⁾unabhängigen Arbeitsindividuums mit seinen Arbeitsbedingungen beruhende Privateigentum wird verdrängt durch das kapitalistische Privateigentum, welches auf Exploitation fremder, aber formell freier Arbeit beruht.*

Sobald dieser Umwandlungsprozeß nach Tiefe und Umfang die alte Gesellschaft hinreichend zersetzt hat, sobald die Arbeiter in Proletarier, ihre Arbeitsbedingungen in Kapital verwandelt sind, sobald die kapitalistische Produktionsweise auf eignen Füßen steht, gewinnt die weitere Vergesellschaftung der Arbeit und weitere Verwandlung der Erde und anderer Produktionsmittel in gesellschaftlich ausgebeutete, also gemeinschaftliche Produktionsmittel, daher die weitere Expropriation der Privateigentümer, eine neue Form. Was jetzt zu expropriieren,⁽⁸⁾ ist nicht länger der selbstwirtschaftende Arbeiter, sondern der viele Arbeiter exploitierende Kapitalist.

Diese Expropriation vollzieht sich durch das Spiel der immanenten Gesetze der kapitalistischen Produktion selbst, durch die Zentralisation⁽⁹⁾ der Kapitale. Je ein Kapitalist schlägt viele tot. Hand in Hand mit dieser Zentralisation⁽⁹⁾ oder der Expropriation vieler Kapitalisten durch wenige entwickelt sich die kooperative Form des Arbeitsprozesses auf stets wachsender Stufenleiter, die bewußte technische⁽¹⁰⁾ Anwendung der Wissenschaft, die planmäßige Ausbeutung⁽¹¹⁾ der Erde, die Verwandlung der Arbeitsmittel in nur gemeinsam verwendbare Arbeitsmittel, die Ökonomisierung aller Produktionsmittel durch ihren Gebrauch als⁽¹²⁾ Produktionsmittel kombinierter, gesellschaftlicher Arbeit, die Verschlingung aller Völker in das Netz des Weltmarkts und damit der internationale Charakter des kapitalistischen Regimes.⁽¹³⁾ Mit der beständig abnehmenden Zahl der Kapitalmagnaten, welche alle Vorteile dieses Umwandlungsprozesses usurpieren und monopolisieren, wächst die Masse des Elends, des Drucks, der Knechtschaft,⁽¹⁴⁾ der Entartung,⁽¹⁵⁾ der Ausbeutung, aber auch die Empörung der stets anschwellenden und durch den Mechanismus des kapitalistischen Produktionsprozesses selbst geschulten, vereinten und organisierten Arbeiterklasse. Das Kapitalmonopol wird zur Fessel der Produktionsweise, die mit und unter ihm aufgeblüht ist. Die Zentralisation⁽⁹⁾ der Produktionsmittel und die Vergesellschaftung der Arbeit erreichen einen Punkt, wo sie unverträglich werden mit ihrer kapitalistischen Hülle. Sie wird gesprengt. Die Stunde des kapitalistischen Privateigentums schlägt. Die Expropriateurs werden expropriert.

Die aus der kapitalistischen Produktionsweise hervorgehende kapitalistische Aneignungsweise,⁽¹⁶⁾ daher das kapitalistische Privateigentum, ist die erste Negation des individuellen, auf eigne Arbeit gegründeten Privateigentums. Aber die kapitalistische Produktion erzeugt mit der Notwendigkeit eines Naturprozesses ihre eigne Negation.⁽¹⁷⁾ Es ist Negation der Negation. Diese stellt nicht das Privateigentum wieder her, wohl aber das individuelle Eigentum auf Grundlage⁽¹⁸⁾ der Errungenschaft der kapitali-

* „Wir befinden uns in einer Lage, die für die Gesellschaft gänzlich neu ist ... wir streben dahin, jede Art Eigentum von jeder Art Arbeit zu trennen.“ (Sismondi, „Nouveaux Principes de l'Écon. Polit.“, t. II, p. 434.)

stischen Ära: der Kooperation und des Gemeinbesitzes der Erde und der durch die Arbeit selbst produzierten Produktionsmittel.¹⁰⁹

Die Verwandlung des auf eigener Arbeit der Individuen beruhenden, zersplitterten²⁰¹ Privateigentums in kapitalistisches ist natürlich ein Prozeß, ungleich mehr langwierig, hart und schwierig als²⁰¹ die Verwandlung des tatsächlich²⁰² bereits auf gesellschaftlichem Produktionsbetrieb beruhenden kapitalistischen Eigentums in gesellschaftliches.²⁰³ Dort handelte es sich um die Expropriation der Volksmasse durch wenige Usurpatoren, hier handelt es sich um die Expropriation weniger Usurpatoren durch die Volksmasse.**

** „Der Fortschritt der Industrie, dessen willenloser und widerstandloser Träger die Bourgeoisie ist, setzt an die Stelle der Isolierung der Arbeiter durch die Konkurrenz ihre revolutionäre Vereinigung durch die Assoziation. Mit der Entwicklung der, großen Industrie wird also unter den Füßen der Bourgeoisie die Grundlage selbst weggezogen, worauf sie produziert und die Produkte sich aneignet. Sie produziert also vor allem ihre eignen Totengräber. Ihr Untergang und der Sieg des Proletariats sind gleich unvermeidlich... Von allen Klassen, welche heutzutage der Bourgeoisie gegenüberstehen, ist nur das Proletariat eine wirklich revolutionäre Klasse. Die übrigen Klassen verkommen und gehn unter mit der großen Industrie, das Proletariat ist ihr eigenstes Produkt. Die Mittelstände, der kleine Industrielle, der kleine Kaufmann, der Handwerker, der Bauer, sie alle bekämpfen die Bourgeoisie, um ihre Existenz als Mittelstände vor dem Untergang zu sichern... sie sind reaktionär, denn sie suchen das Rad der Geschichte zurückzudrehn.“ (Karl Marx und F. Engels, „Manifest der Kommunistischen Partei“, London 1848, p. 11, 9.)

註解

- (1) 初版には、この表題はない。初版では、第何篇という区分けはなく、「資本の蓄積過程」と題する第6章は、第1節「資本主義的蓄積」、第2節「いわゆる本源的蓄積」、第3節「近代植民理論」という構成になっていた。その第2節の最後のところに見出しなしで当該部分が含まれている。

この表題が付されたのは、第2版以降のことである。第2版では、章が篇となり、全体は25の章に分けられた。当該部分は、第7篇「資本の蓄積過程」(第6篇「労働賃銀」が入って、初版の章数に比べ第2版の篇数はひとつ増加した)、第24章「いわゆる本源的蓄積」、第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」となった。

ちなみに、マルクスが校訂したフランス語版では、ドイツ語版第24章「いわゆる本源的蓄積」は、第25章「近代植民理論」とともに第7篇から分離独立して第8篇を構成することになり、ドイツ語版の第1～第7節がそれぞれ章となった。その結果、ドイツ語版第24章第7節は、フランス語版第8篇第32章となっている。エンゲルスが校閲した英語版も、フランス語版の構成にしたがっている。

- (2) Privateigentum, als Gegensatz……に始まり, Zwischenzustände wider. に終るこのパラグラフに相当する文章は、初版および第2版にはない。フランス語版において書き加えられ、第3版以降定着をみたものである。なお、この第7節は、ここに挙げたように8個のパラグラフから構成されているが、

- 第 2 版までは 3 個の区切りがなされていたにすぎない。つまり、ここに挙げたもので、第 7 のパラグラフ、第 8 のパラグラフに相当するものは、初版においても、ともに存在していたが、それより前の部分は一括されてひとつのパラグラフとなっていた。現在のような区切りになったのは、フランス語版の影響を受けた第 3 版以降からである、と考えられる。
- (3) worauf は、第 2 版まで womit となっていた。
- (4) Wie die Konzentration der letzteren, so schließt sie auch die Kooperation, …… の Wie~, so の構文は、第 2 版まで Mit der Konzentration der letzteren schließt sie die Kooperation, ……となっていた。
- (5) freie Entwicklung の freie は初版にはない。第 2 版以降書き加えられている。
- (6) Sie verewigen wollen hieße, wie Pecqueur mit Recht sagt, „die allgemeine Mittelmäßigkeit dekretieren“ の一句は第 2 版まで存在しない。フランス語版において L'éterniser, ce serait, comme le dit pertinement Pecqueur, „décréter la médiocrité en tout.“ の一句が書き加えられたのを受けて、第 3 版以降において挿入されることになった。
- (7) einzelnen が、初版、第 2 版においては isolierten となっていた。
- (8) 初版では、Was jetzt zu expropriieren ist, ist nicht ……となっていた。
- (9) Zentralisation は、第 2 版まで Koncentration が用いられていた。フランス語版では durch die Zentralisation der kapitale に相当する方には à la concentration des capitaux と concentration 「集積」が用いられ、Hand in Hand mit dieser Zentralisation に相当する方には Corrélativement à cette centralisation と centralisation 「集中」が用いられている。
- (10) technische は第 2 版まで technologische が用いられていた。
- (11) planmäßige Ausbeutung der Erde は、第 2 版まで planmäßig gemeinsame Ausbeutung der Erde 「計画的、共同的な土地の利用」という風に gemeinsame 「共同的な」が含まれていた。フランス語版では、l'exploitation de la terre avec méthode et ensemble 「組織的、全体的な土地利用」という風になっている。
- (12) 第 2 版まで als と Produktionsmittel の間に gemeinsame が挿入されていた。
- (13) die Verschlingung aller Völker から kapitalistischen Regimes までの一句は、第 2 版まで存在しない。フランス語版以降、加えられたものである。
- (14) der Knechtschaft は、第 2 版まで der Knechtung が用いられていた。
- (15) der Entartung は、第 2 版まで der Degradation が用いられていた。
- (16) Die aus der kapitalistische Produktionsweise hervorgehende kapitalistische Aneignungsweise は、第 2 版まで、Die kapitalistische Produktions—und Aneignungsweise 「資本主義的生産および領有様式」となっている。
- (17) Aber die kapitalistische Produktion erzeugt mit der Notwendigkeit eines Naturprozesses ihre eigne Negation. は、第 2 版までは、Die Negation der kapitalistischen Produktion wird durch sie

selbst, mit der Nothwendigkeit eines Naturprocesses, producirt.「資本主義的生産の否定は、一種の自然過程の必然性をもって、資本主義的生産自身によって産み出される」と受動態の表現になっていた。

(18) この部分は、第2版まで Diese stellt das individuelle Eignthum wieder her, aber auf Grundlage……「これは、個別的の所有を再興するのであるが、しかし……」となっていた。現行版における「私有を再興するのではないが……」という一句が存在しなかった訳である。

(19) この部分は、第2版まで der Kooperation freier Arbeiter und ihrem Gemeineigenthum an der Erde und den durch die Arbeit selbst producirtten Produktionsmitteln. となっていた。現行版と比較して、文字面での変更は相当多いが、意味上の変更として注目されるのは der Kooperation freier Arbeiter und ihrem Gemeineigenthum「自由な労働者の協同と彼らの共有」というように「自由な労働者」の一句が挿入されていたことである。

(20) zersplitterten は初版では、auf eigner Arbeit der Individuen beruhendenの前に置かれていた。第2版より現行版の通りになる。

(21) 初版では、natürlich ein ungleich mehr langwieriger, harter und schwieriger Prozess als……と、比較級の表現とProzessの位置が、第2版以降と少し異なっていた。

(22) tatsächlich は、第2版まで faktisch となっていた。意味上は同義で、変更はない。

(23) 初版では、auf gesellschaftlicher Exploitation der Produktionsmittel beruhenden

den「生産手段の社会的搾取に基づく」となっていた。auf gesellschaftlichem Produktionsbetrieb beruhenden「社会的生産経営に基づく」となるのは第2版以降のこと。また第2版までは kapitalistischen Privateigenthums in gesellschaftliches Eigenthum「資本主義的私有の社会的所有への……」となっていて、現行版 kapitalistischen Eigentums in gesellschaftliches「資本主義的所有の社会的所有への……」と少し異なっている。

三

著者マルクスによる自己評価

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」について、従来どのような評価がなされてきたか。

それを、まずマルクス自身の記述に求めることから、探してみたい。彼は、ロシアの雑誌『オテーチェストヴェンヌ・ザピスキ』の編集部にあてた手紙を残している¹⁾。それは、ナロードニキの理論家エヌ・カ・ミハイロフスキーが「ジュコーフスキー氏に裁かれたカール・マルクス」という論説を同誌1877年10月号に発表した直後に、その論説に関連して書かれたものである。他にも興味ある論点を含むものではあるが、いま当面の問題に直接関連する個所だけを引用してみると、次のような叙述がある。

「本源的蓄積にかんする章は、西ヨーロッパにおいて資本主義的経済秩序が封建的経済秩序の胎内から生まれでてきたその道をあとづけようとだけするものであります。したがって、それは、生産者をその生産手段から分離させることによって前者を賃労働者（ことばの近代的な意

味でのプロレタリア)に、後者〔生産手段〕の所有者を資本家に転化させた歴史的運動を、叙述しています。この歴史においては、『形成途上にある資本家階級にとって上昇の槓杆として役だつすべての変革が、時代を画するものであるが、とくに、多数の大衆から彼らの伝来の生産手段と生活手段を奪いさることによって彼らを不意に労働市場に投げ込む変革が、そうである。しかし、この発展全体の基礎は、耕作者の所有剥奪〔収奪——翻訳者補足〕である。これが根本的に遂行されたのは、まだイギリスにおいてだけである。……だが、西ヨーロッパのすべての国もこれと同一の運動を経過する』等々(『資本論』、フランス語版、315頁)。この章の最後に、この〔資本主義的——翻訳者補足〕生産の歴史的傾向が次のように要約されています。すなわち、この生産は、『自然の転変を支配する不可避性をもって、おのれ自身の否定をみずから生みだす』、この生産は、同時に社会的労働の生産諸力とすべての個人的生産者の全面的発展とに最大の飛躍をもたらすことによって、新たな経済秩序の諸要素をみずから作りだした、また、資本主義的所有は、事実上すでに集団的生産様式の上に立脚しているので社会的な所有に転化するほかはない、ということがそれであります。ここで私は、これについての証明を与えることはしません。私のこの主張そのものが、それにさきだって資本主義的生産についての諸章のなかに与えられている長い叙述の要約にほかならない、という十分な理由があるわけですから。」

ここに引用したマルクスの記述は、いうまでもないことながら、「本源的蓄積にかんする章」つまり第1巻第24章に論及したものであり、特にその後半部分で、「この章の最後」つまり第

7節が採りあげられている。ここに述べられている趣旨は、説明するまでもなく、明瞭であるが、注目すべき点として、次のような事柄が挙げられる。

第一に、「いわゆる本源的蓄積」の章については、本源的蓄積を資本主義的蓄積と同時併存的なものとししないで、資本主義的蓄積にたいしてその歴史的 前提をなすものと考えていることが、重要である。本源的蓄積を、「資本主義的経済秩序が封建的経済秩序の胎内から生まれでてきたその道」として、つまり資本主義のないところへ資本主義をつくりだす過程として、把握しているのであるが、そうであれば、この過程はある資本主義社会において一度きりのものであり、原理的にくりかえす法則性をもつものではないと考えられることになる。この点を敷衍すると、『資本論』第1巻第4章「貨幣の資本への転化」で産業資本形式を説くときに、この本源的蓄積の過程が当然前提されているにもかかわらず、そこで、この本源的蓄積の問題を解明することをしないで、第1巻の末尾近い第24章で回顧して究明するという構成になっていることが注目される。つまり、本源的蓄積の過程は歴史的にくり返さない一回性のものであるところから、貨幣の資本への転化の論理のような(本源的蓄積の過程を前提としたうえでのことではあるが)原理的にくり返す法則性のものと峻別されている訳である。別言すれば、貨幣の資本への転化の論理と資本主義の歴史的な生成とを対応するものと看做して、最終的には資本主義の生成・発展・消滅の論理的証明を与えるとする方法論とは、対極に立つような方法をマルクスは示しているといつてよいであろう。

第二に、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の節については、「資本主義的生産は、自然の転

変を支配する 不可避性をもって、おのれ自身の否定をみずから産み出す」La production capitaliste engendre elle-même sa propre négation avec la fatalité qui préside aux métamorphoses de la nature という一句を特別に引用して、資本主義的生産の発展の裡にみられる新経済制度を構成する諸要素の醸成、資本主義的所有の社会的所有への転化を強調していることが、注目に値する。つまり、ここでは、資本主義の発展と消滅、そして新しい社会制度の生成という歴史的変革の過程に関して、理論的にその必然性を証明しようという方法的立場を明記しているのである。このような方法論が、「いわゆる本源的蓄積」を第1巻の末尾で説くという構成の仕方に窺える方法論とは、基本的に背馳するものであることは、いうまでもない。その双方の是非を論ずることは、後述に譲ることにして、ここでは「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の節にたいする著者自らの評価として、次の三点を念頭においておきたい。(一)マルクスはそこでの自らの主張を顧みて疑義を生じた形跡はなく、むしろ積極的に主張の正当性を確認している気配が濃いこと。(二)ただ、そこでの主張については、マルクス自身もみとめているように、何の証明も与えられていないこと。(三)その主張に証明が与えられていない理由を成す事情でもあるが、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の節は、「それに先だって資本主義的生産についての諸章のなかに与えられている長い叙述の要約」であると位置づけられていること。

「それに先だって資本主義的生産についての諸章のなかに与えられている長い叙述」というとき、それが『資本論』のどの部分を指すかは、必ずしも明確ではない。マルクスがここで参

看しているフランス語版においては「本源的蓄積」は第8篇として独立し、ドイツ語版における各節は各章として扱われているために、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論をいわゆる「本源的蓄積」論の要約とする考え方も生まれうる。後にみるエンゲルスのばあいはそうである²⁾。筆者は、「資本主義的生産についての諸章」という用語にみられる形式上の特徴と、ここで扱われている問題が主として「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論のうちでも(封建社会から資本主義への移行でなく)資本主義から新しい経済制度への転化に関連するものであるという内容上の特徴から、エンゲルスのばあいより広く範囲をとりたいと考える。少なくとも第11章「協業」第12章「分業とマニフクチュア」第13章「機械と大工業」などを含む第4篇、第22章「剰余価値の資本への転化」第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」などを含む第7篇を除くことはできないであろう。さらには、『資本論』第1巻の全体の表題がドイツ語版で、「資本の生産過程」とされ、フランス語版では、「資本主義的生産の発展」と一段と特徴的なものにされていることを勘案するとき、「それに先だって資本主義的生産についての諸章で与えられている長い叙述の要約」というマルクスの表現は、『資本論』第1巻全体の「凝集的総括」³⁾を意味するものだとする考え方にも、相当の根拠を認めねばならないだろう。

いずれにしろ、マルクスが「資本主義的蓄積の歴史的傾向」という一節を、相当に重要なものとして評価していたのは、まず大地を打つよりも確実なことと考えてよいであろう。

1) Karl Marx; *Brief an die Redaktion der "Otshestvennyye Sapiski"* 1877. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 19, 1962, S. 107—112.

(邦訳、『マルクス・エンゲルス全集』、第19巻、1968年刊、116頁)。

2) 本文350—351頁参照。

3) 平田清明『経済学と歴史認識』、1971年刊、461頁

エンゲルスによる支持と拡充

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を、エンゲルスは、『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』(『反デューリング論』)の第1篇「哲学」の第13章「弁証法、否定の否定」において、取り扱っている¹⁾この一節に関するデューリングの批判を採りあげ、それに反批判を試みているのである。

第13章「弁証法、否定の否定」の冒頭に、エンゲルスが引用しているところからみると、デューリングの主張は、次のようなものである。「この(イギリスにおけるいわゆる資本の本源の蓄積の発生についての——エンゲルス)歴史的概説は、マルクスのこの著書(『資本論』——引用者)のなかでは、比較的にいってまだしもいちばんよい部分であって、もしそれが、物知りぶりという松葉杖のほかに、さらに弁証法という松葉杖にすがって歩いていなかったら、もっとよかったであろう。というのはここでは、もっとよい、もっと明瞭な手段がないために、ヘーゲルの否定の否定が、過去の胎内から未来を分娩させる産婆役を勤めなければならないからである。上に略述したような仕方では16世紀以来おこなわれてきた個人的所有の揚棄が、第一の否定である。これに第二の否定がつづくが、それは、否定の否定として、したがって、『個人的所有』の再興、ただし土地および労働手段の共同所有を基礎としての、より高い形態での再興として、特徴づけられている。マルクス氏が、この新しい『個人的所有』を同時にまた『社会的所有』ともよんでいるのは、むろ

ん、ヘーゲルの言う、矛盾を揚棄した——揚棄というのはことばのしゃれであって、つまり、克服したと同時に保存しているということである——高次の統一がここに現われているというわけである。……これで見ると、収奪者の収奪は、歴史的現実がその物質的な外的諸関係のうちにいけば自動的に生みだす結果だということになる。……分別のある人間なら、否定の否定といったふうの、ヘーゲルのぺてんを信用して土地および資本の共有制の必然性を納得するような者は、まずいないであろう。……それはとにかく、ヘーゲルの弁証法などを科学的基礎として、いったいどんな辻褃のあったものがつくれるものか、というよりむしろ、どんな辻褃のあわないものが生まれてくるにきまっているかを知っている人なら、マルクスの諸観念の朦朧とした雑種形態を見ても、不思議には思わないであろう。(後略——引用者)」

このデューリングのマルクス批判の要点は、エンゲルスが要約して言うように、「マルクスは、社会革命の必然性、土地および労働によって生産された生産手段の共同所有に〔基礎をおく社会制度——翻訳者補足〕が打ち立てられる必然性を、ヘーゲルの否定の否定を抛りどころにしないでは証明できないのである」というところにある。

こういうデューリングの批判にたいして、エンゲルスは、次のような反批判を展開する。

「では、マルクスにおいては、否定の否定はどういう役割を演じているのか。彼は791頁(エンゲルスが参照しているドイツ語版第2版では、791頁から第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」が始まっている——引用者)以下に、それに先だつ50頁(ドイツ語版第2版においては第24章「いわゆる本源の蓄積」は742—793頁

を占めている——引用者）にわたっておこなった、いわゆる資本の本源の蓄積にかんする経済学および歴史的な研究の結論をまとめている。資本主義以前には、すくなくともイギリスでは、労働者が自分の生産手段を私有することに基礎をおく小経営がおこなわれていた。いわゆる資本の本源の蓄積は、この国では、これらの直接的生産者を収奪すること、すなわち、自己労働にもとづく私的所有者を解消させることにあった。こういうことが可能になったのは、前記の小経営が、生産および社会の狭い、自然的な枠としか両立しえないものであって、したがって、ある高度に達すると、それ自身を滅亡させる物質的手段を生みだすからである。この滅亡、すなわち、個人的な、分散した生産手段から社会的に集積された生産手段への転化が資本の前史をなすのである。労働者がプロレタリアに転化され、彼らの労働条件が資本に転化されるやいなや、資本主義的生産様式が自分の足で立つようになるや、労働のそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の〔資本への——翻訳者補足〕それ以上の転化とは、したがって私的所有者のそれ以上の収奪は、新しい形態をとるようになる。」その後について、『いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である』に始まり『資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される』に至るまでの『資本論』からの引用部分が来る。そして、こう言う。「そこで読者におたずねしよう。弁証法ふうにかみいった錯綜や、観念の唐草模様はいったいどこにあるのか。それによると、結局すべては一つになってしまうという、ごたまぜのまちがった観念はいったいどこにあるのか。信者のための弁証法的奇跡はいったいどこ

にあるのか。デューリング氏に言わせるとマルクスが彼の展開を仕上げるのに欠かしえないものだという、弁証法の秘密めかしいたわごとや、ヘーゲルのロゴス説に準拠した錯綜した議論は、いったいどこにあるのか。マルクスは、かつて小経営がそれ自身の発展によって自らの滅亡のための、すなわち小所有者の収奪のための諸条件を必然的に生みだしたのとまったく同じように、いまや資本主義的生産様式もやはり、自己の没落を不可避とする物質的諸条件を自ら生みだし簡単にまとめているだけである。この過程は一つの歴史的過程であって、それが、同時に弁証法的な過程であっても、そのことは、デューリング氏にとってどれほど不快であるにせよ、マルクスの罪ではない。／マルクスは、彼の歴史的・経済学的証明を終えてから、いまはじめてそれに続けて次のように述べる。『資本主義的生産様式および領有様式は、したがって資本主義的な私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。資本主義的生産の否定は、資本主義的生産そのものによって、自然過程の必然性をもって生みだされる。それは否定の否定である』うんぬん（以下はまえに引用したとおり）。」「以下はまえに引用したとおり」とは、『それは否定の否定である』以下の第7節の最後尾部分は、先のデューリングの議論の紹介の後で、既に引用済みであることによる。

こういうエンゲルスの反批判は、次の一句によって締め括られる。「だから、マルクスがこの過程を否定の否定とよんでいるのは、そうすることでこの過程が歴史的に必然的なものであることを証明しようとしているのではない。その反対である。彼は この過程が実際に一部はすでに起こっており、一部はこれから起こらざる

をえないということを歴史的に証明したあとで、それにつけくわえて、この過程を、一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程とよんでいるのである。それだけのことである」と。

ここでみた限りのデューリングとエンゲルスの議論をふりかえると、こういう形にまとめられる。デューリングの側は、収奪者の収奪の必然性（社会革命の必然性）、生産手段の共有に基礎をおく社会制度の樹立の必然性が、経済過程そのものの論理によって説明されないで、「弁証法という松葉杖」「ヘーゲルの否定の否定」によって論証が代行されているという趣旨の批判をなし、エンゲルスの側は、「マルクスは、かつて小経営がそれ自身の発展によってみずからの滅亡のための、すなわち小所有者の収奪のための諸条件を必然的に生みだしたのとまったく同じように、いまや資本主義的生産様式もやはり、自己の没落を不可避とする物質的諸条件をみずから生みだしたということを歴史的に証明して」いるのであり、「彼の歴史的・経済学的証明を終えてから」「この過程を一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程とよんだ」にすぎないという論旨の反駁をなしている。

このように、エンゲルスは、第7節のマルクスの論理を再検討するのではなく、その肯定的引用と解釈に終始していると、といってよい。そしてそこでのエンゲルスの主張には、次のような特徴がある。第一に、第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの論理の全面的な支持であり、第二に、その支持の根拠を成すのは、この節が第24章「いわゆる本源的蓄積」における「経済学および歴史的な研究の結論をまとめている」部分だからということ

であり、第三に、そのことは、具体的には、資本主義の生成を、「小経営がそれ自身の発展によって自らの滅亡のための」条件を必然的に生みだした過程として捉え、それとの類推によって、資本主義の消滅を、「資本主義的生産様式もやはり自己の没落を不可避とする物質的諸条件を自ら生みだす過程として考えようとするものである。エンゲルスはここで、先にみたマルクスの第二の方法的立場——資本主義の発展と消滅という歴史的変革の過程に関してその必然性を理論的に証明しようという方法的立場を是認するとともに、自らそういう見地に立っているとの表明を行なっているといえよう。

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの論理展開を全面的に支持したエンゲルスは、そこにみられる方法的立場を踏襲しつつ、自らもまた、資本主義の消滅と新しい社会の生成との道程を描くことになる。『反デューリング論』における第3篇「社会主義」第2章「理論的概説」がそれである²⁾。この章が、『反デューリング論』の序説第1章「総論」および第3篇第1章「歴史的概説」と合わせて、小冊子『空想から科学への社会主義の発展』として広く流布していることは周知の通りである。

このエンゲルスの「理論的概説」は、その基調からみて、マルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の、エンゲルスの拡充版である、と考えられる。無論のこと、エンゲルスのこの叙述には、単純な翻案でない部分も含まれている。一方では、「中世にはこういうふうであった。たとえば、農民は農産物を手工業者に売り、そのかわりに後者から手工業製品を買った」というように、資本主義社会に先行する社会に、いわゆる単純商品生産の世界を想定しつつ、他

方では、「中世の社会では、ことにはじめの数世紀には、生産は本質的に自家消費を目あてとしていた。それはおもに生産者とその家族の欲望をみたただけであった。農村のように、人身的な隷属関係があったところでは、生産はまた封建領主の欲望をみたすことにも役だった。だから、この場合には、交換は行なわなかったし、したがって、生産物が商品の性格をとることもなかった」と、かなり正確に商品生産を否定している。この異なる視点のうち、後者は、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの論理には欠落していたものであり、単純な翻案でない部分といえる。しかし、全体の論理の基調は、以下にみる通り、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」のそれであり、その骨組に、より具体的な説明を付加したのが、「理論的概説」だといって過言ではないだろう。

唯物史観のエンゲルス流の定式化から出発したこの「理論的概説」において、封建社会から資本主義への変化は、こう説明される。「資本主義的生産以前には、すなわち中世には、労働する者が自分の生産手段を私有することに基礎をおく小経営が、ひろく存在していた。自由なまたは隷農的な小農民の農耕、都市の手工業がそれである。労働手段は、……必然的にちっぽけな、矮小な、制限されたものであった。」「これらの分散した、局限された生産手段を集積し拡大して、強力に作用する現代の生産の槓杆に変えること、これこそが、資本主義的生産様式とその担い手であるブルジョアジーとの歴史的役割であった。」「いまや個人的生産者、商品生産者のこの社会のなかに、新しい生産様式が割りこんできた。それは、全社会の範囲でおこなわれている自然生的な、無計画的な分業のまっただなかに、個々の工場の範囲で組織された

計画的な分業をもちこんだ。個人的生産とならんで、社会的生産が現われてきた。……個人的生産は一分野また一分野と敗退していった。社会的生産は古い生産様式全体を変革した。」

こうして出現した資本主義に「内在する矛盾」については、こう述べられている。「中世に発展していたような商品生産のもとでは、……生産物の所有は自己の労働に基づいていたのである。」「いまでは、労働手段の所有者は、生産物がもはや彼の生産物ではなく、もっぱら他人の労働の生産物であったにもかかわらず、それを領有しつづけた。こうして生産物は、いまでは社会的に生産されるようになったのに、それを領有するのは、生産手段を実際に動かし生産物を実際に作りだした人々ではなく、資本家であった。生産手段と生産とは本質的に社会的なものになった。だが、それらは、個々人が私的生産を前提とする領有形態、したがって各人が自分自身の生産物を所有し、それを市場に持ち込む場合の領有形態に従わせられる。」「新しい生産様式がすべての決定的な生産分野とすべての経済的に決定的な国々でますます支配的になり、それにつれて個人的生産を駆逐して、とるに足りない残存物にしてゆけばゆくほど、社会的生産と資本主義的領有とがあいいれないこともますますまざまざと明るみに出ないわけにはいかなかった。」

このような「矛盾」の「現象形態」として、ふたつの事項が挙げられている。ひとつ。「以前には例外であり一時しのぎであった賃労働が、全生産の常則となり、基本形態となった。……一方の、資本家の手に集積された生産手段と、他方の、自分の労働力以外にはなにももたないようになった生産者との分離が完了していた。社会的生産と資本主義的領有との間の矛盾

は、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立となって明るみに出た。」ふたつ。「資本主義の生産様式が現われるとともに、……生産者はますます独立のばらばらな商品生産者に転化した。社会的生産の無政府状態が明るみに出てきて、ますます極端になっていった。しかし資本主義の生産様式が社会的生産のこの無政府状態を募らせるのに用いた主な手段は、正に無政府状態の反対物であった。それは、各生産企業内で、生産をますます社会的生産として組織してゆくことであった。……社会的生産と資本主義的領有との間の矛盾は、個々の工場内における生産の組織化と全体としての社会における無政府状態との対立として再生産される。」

「資本主義の生産様式は、その起源からしてこの生産様式に内在する矛盾のこの二つの現象形態のなかを運動する」という規定から、エンゲルスは「恐慌」を導出することになる。「生産の社会的無政府状態という推進力こそが、大工業の機械の限りなく改良されてゆく可能性を、各産業資本家にとっての、没落したくなければ自分の機械をますます改良しなければならない、という強制命令に変える。だが機械の改良は、とりもおさず人間の過剰化である。機械の採用と増加は、少数の機械労働者による数百万の手工業労働者の駆逐を意味するが、機械の改良は、機械労働者自体の駆逐を意味し、結局は資本の平均的雇用需要を超過する多数の待機の賃銀労働者、本式の産業予備軍の創出を意味する。」「自分の生産領域を拡張しうる事実上の可能性もまた、各産業資本家にとって同様な一つの強制命令に変わる。大工業の巨大な膨脹力は、それに比べればガスの膨脹力など兎戯に等しいほどのものであるが、いまやそれはいかなる障碍をも突破しようとする質的及び量的膨脹欲と

してわれわれの眼前に現われる。その障碍をなすものは、大工業の生産物に対する消費、販路、市場である。だが、市場の膨脹は、外延的であれ内包的であれ、全く別の遥かに軟弱な法則に支配されている。市場の膨脹は生産の膨脹と歩調を合わせることが出来ない。衝突は不可避である。そしてこの衝突には、資本主義の生産様式そのものが爆破されない限り、なんの解決もないから、衝突は周期的に繰り返される。資本主義の生産は、一つの新しい『悪循環』を生みだす。」「恐慌においては、社会的生産と資本主義的領有との間の矛盾が暴力的に爆発する。……生産力が、生産様式をこえて成長して、この生産様式に反逆するのである。」「一方では、資本主義の生産様式はこれ以上これらの生産力を管理する能力がないことの動きのとれない証拠を突きつけられる。他方では、これらの生産力自体が、この矛盾の止揚を、資本たる性質からの自らの解放を、社会的生産力としてのそれらの性質の事実上の承認を、ますます力強く迫ることになる。」

このような「恐慌」から社会変革に至る道程は、エンゲルスにあっては、極めて近い。その道筋は、ほぼ次のようなものである。「この解決は、近代の生産力の社会的な本性を実際に承認すること、したがって生産、領有、交換の様式を生産手段の社会的性格と一致させること以外にない。そのためには、社会以外の何物の手にも負えないほど成長した生産力を、社会が公然かつ直接に掌握する以外に道はない。」「資本主義の生産様式は、人口の大多数をますますプロレタリアに転化することによって、没落を免れんがためにどうしてもこの変革を成就しなくてはならない勢力を作り出す。資本主義の生産様式は、大規模な社会化された生産手段の国家

的所有を推進することによって、この変革の成就の道を自ら示す。プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまず国家的所有に転化する。だが、これによって、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を、またあらゆる階級区別と階級対立を、そしてまた国家としての国家を、止揚するのである。」

以上のように、「大工業は一層の全面的発展の結果、それが挿し込められている資本主義的生産様式の枠と衝突するようになる。新しい生産力は、既にブルジョア的な利用形態では使いこなせないほどに成長したのである」という生産力と生産様式の矛盾を起動力としつつ、「必然の国から自由の国への人類の飛躍」が述べられている。

このようなエンゲルスの叙述には、マルクスとの相異点がないわけではない。たとえば、マルクスが、「生産力」と「生産様式」との関係、「生産様式」と「生産関係」との関係（第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」）として「矛盾」を把握するとき、エンゲルスはそれを、「生産力」と「生産様式」との衝突関係として理解している。だが、マルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」とエンゲルスの「理論的概説」とを全体として比較してみるならば、使用されている用語、展開される論理において、著しい類似性を、強く印象づけられるのであり、「理論的概説」は「資本主義的蓄積の歴史的傾向」のエンゲルスの拡充版として位置づけられるであろう。

1) Friedrich Engels; *Herrn Eugen Dühring's Umwälzung der Wissenschaft, Philosophie. Politische Oekonomie. Sozialismus*, 1878. *Werke*, Bd. 20, 1962, S. 120—133.
(邦訳、『マルクス・エンゲルス全集』第20巻, 1968

年刊, 135—148頁)。以下、引用はすべてこの部分からである。

2) *a. a. O.*, S. 248—265. (邦訳, 同上書, 276—292頁)。以下、引用はすべてこの部分からである。

ベルンシュタインとカウツキー

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」は、いわゆる修正主義論争の過程において、マルクス主義修正派、ベルンシュタイと擁護派カウツキーによってもまた、こども論議の対象とされている。そこにおけるこの節に対する評価を看取することができるであろう。

ベルンシュタインは、その著作『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』の第1章「マルクス主義的社会主義の基本的命題」において、マルクスによる「資本主義的生産ないし占有様式の歴史的傾向」について、次のように述べている¹⁾。

「資本の過剰生産が、労働者の過剰化と手をたずさえて進行する。工業、商業、農業においてますます大規模な集中化が広がり、また、一層大きな資本家による小資本家収奪の激化が広がる。大衆の過小消費と結びついた生産の無政府性が惹起する周期性恐慌は、ますます激烈に、ますます破壊的に立現れ、無数の小資本家たちの殲滅を通してこの集中・収奪過程を促進する。一方では、労働過程の集合的——協同的——形態が、不断にその規模を増大させつつますます一般化する。他方では、『この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨脹しながら、資本主義的生産過程そのものの機構によ

って訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。』こうして、その発展の向かうところ、資本独占が、それとともに開花した生産様式にとってその桎梏と化し、生産手段の集中および労働の社会化がその資本主義的外皮とは調和しえなくなる一点が現われてくる。そこで、この外皮が爆破され、収奪者や横領者が人民大衆により収奪され、資本主義的私有財産が止揚される。——マルクスによれば、以上が資本主義的生産ないし占有様式の歴史的傾向である。資本家階級を収奪し、資本主義的所有を公的所有へと転化することを使命とする階級は、賃銀労働者の階級、すなわちプロレタリアートである。この目的のため、プロレタリアートは階級政党として組織されなければならない。この階級は、ある所定の瞬間に国家権力を掌握し、『生産手段をまず国家的所有に転化する。だが、これによって、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を、またあらゆる階級区別と階級対立を、そしてまた国家としての国家を、止揚するのである。』抗争や暴力行為をとまなう個人の生存競争はおわり、国家は抑圧すべきものをもはや持たず、『死滅する』（エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展』）。²⁾

このベルンシュタインの文章が引用符を以て示した二つの引用文は、前者がマルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」からであり、後者がエンゲルスの『空想から科学への社会主義の発展』の第3章（『反デューリング論』でいえば第3篇第2章「理論的概説」に相当する部分）からである。そのような面からみても、また全体的な用語使用や論理展開という面からみて

も、この文章の趣旨が、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」と「理論的概説」との合成に依ることとは、明らかである。

こういう風にマルクス、エンゲルスの資本主義の消滅と社会主義の成立とに関する把握を要約したベルンシュタインは、こういう把握を終章「最終目標と運動」において、次のような形で批判する。

「労働者の状態の絶望性という先に引用したマルクス主義的命題は、『資本論——経済学批判』と命名されている一書のなかで覆えられているのである。同書では、1847年の工場法によって生じたランカシャーの繊維労働者たちの『肉体的および精神的な更正』が、『どんな鈍い目にもはっきりと映った』と書かれている。したがって、一大カテゴリーの労働者層の状態にある種の改善をもたらすのに、ブルジョア共和制すらもが必要ではなかったのである。同書中には、現在の社会が『けっして堅固な結晶体ではなく、変化することの可能な、そしてつねに変化の過程にある有機体』であるということ、そしてこの社会の公式の代表者たちの側で経済的問題が取扱われる場合にも、『進歩があることは見紛うべくもない』ことが、述べられている。さらに、同書の著者がイギリスの工場立法の結果について同書中で非常に多くの紙数をさいたのは、大陸でもそれが見倣われるよう励まし、そうすることによって、社会の変革過程がますます人道的な形で成就するよう仕向けるためである、と書かれている（『資本論』第1巻、序文）、これらはすべて、労働者の状態の絶望性をではなく、その改善可能性を意味するものである。そして、それらのことが書かれた1866年以後、右に述べたような立法は

弱まるどころか改善され、一般化され、同方向に作用する法律や制度によって補完されてきたのであるから、今日では労働者の状態の絶望性について語ることは、往時よりももっとできない相談になっている。このような諸事実を確認することがもしく不死のバ스티ア> (Frédéric Bastiat, 1801–50, フランスの経済学者、自由放任による社会的調和を説いた——引用者註) に追随することを意味するということであれば、誰であろうカール・マルクスこそが、まさきにこの自由主義的経済学者の追随者のひとりということになる³⁾。」

ここでベルンシュタインは、労働者の状態の改善の事実についての『資本論』中の記述、および『資本論』初版執筆後における労働者の状態の改善促進という現実を指摘して、それとの対比において、先にみたような労働者階級の窮乏化に関するマルクスの抽象的規定の当否を問題としている、とみてよい。そのような論議の姿勢に著しい特徴は、資本主義の消滅と社会主義の成立の必然性についてこれを労働者階級の窮乏化傾向を重要な環として説明しようとするマルクス＝エンゲルスの理論的規定そのものの分析を行なわないままであること、そのうえでこの一般的性格の理論的規定——しかも、その一部分を直接にある特定の現実の事例と突き合わせて、その不適合を理由として理論的規定の誤りの証左とすることにある。そこでは、前者と後者の論理的次元の差異については、全く考慮が払われていないのである。

一般的抽象的理論と特定の具体的事実との直接的対置によって、前者の当否を問うというベルンシュタインの発想は、上の引用個所の少し

後にある次の文章にも、いよいよ濃厚に横溢している。

「さて、私に向かってこう反論するひとがいるかも知れない。すなわち、なるほどマルクスは、先述のようないくつもの改善があったことを認めはしたが、しかし、そういった個々の点は彼の根本的見解にほとんど影響を及ぼさなかった。このことは『資本論』第1巻の最終の資本主義的蓄積の歴史的傾向を論じた章によって証明されている、と。これに対して私は、こう答えずばなるまい。それが正しい限りにおいて、それは問題の章の反論となるものであって、私への反論となるものではない。——引用されることの多いこの章は、きわめてさまざまな意味に解釈することができる。この章は、資本主義的蓄積に内在する発展傾向を概括的に描写するものであるが、しかし、この発展傾向は実際には純粹に貫かれるのではなく、したがって、また、そこに記されているような対立の尖鋭化にまで進むには及ばないのだという解釈を打出し、しかもその旨を繰返し述べた最初の間は、私であると思う。エンゲルスは、私のこのような解釈にけっして反対したことがないし、これを誤りであるなどと口頭でも印刷物でも述べたことがないのである。また、私は1891年にシュルツェ・ゲヴァーニッツのある著述を論じた一論文で、この問題に関して次のように書いたことがあるが、そのときにもエンゲルスは一言もそれに反論しなかった。『立法、すなわち社会の計画的、意識的行動が適度の介入を行なう場合、経済的發展のもつ諸傾向の支配が妨げられ、事情いかなるによっては、止揚されることすらあるのは、明らかである。マルクスとエンゲルスは、こ

のことを否定しなかっただけではなく、反対にそれをいつも強調したのである』と(『ノイエ・ツァイト』誌、第9巻、第1分冊、736頁。)このような理解に立って、先掲の章を読むならば、その章の個々の命題においてもやはりつねに、暗黙のうちに『傾向』という言葉が書き添えられることになるであろうし、そうしてみれば、曲解的な解釈術によって命題と現実とを調和させてみせたりする必要はなくなることがわかるであろう。しかしながら、そのあかつきには、現実の進化が進めば進むほど、その章自体はますます重要でなくなってゆくであろう。ないしは、そうやってゆくはずである。なぜなら、同章の理論的重要性は、資本主義的集中と蓄積との一般的傾向——それは、マルクスよりはるか以前にブルジョア経済学者や社会主義者によって確認されていた——が確証されていることにあるのではなく、より高度の段階で集中と蓄積とが実現される際の事情と形態について、またそれらが導くはずの結果について、マルクスが独自の叙述を与えている点にあるからである。この点についてはしかし、現実の進化はつねに新しい制度や勢力、つねに新しい事実を成熟させてゆくのであり、それらに照らしてみると、この章にみられる叙述は不十分と思えるし、将来の予示として役立つ能力もそれに応じて低下してゆくのである。これが私の見解である⁴⁾。」

このように、マルクスの第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」は、そこで用いられる概念や展開されている論理が吟味され解析されるという形では、問題とされていない。その意味では、そこでの論理展開そのものは是認ないしは

黙認されているということもできるかも知れない。マルクスの第7節について、ベルンシュタインは、「資本主義的集中と蓄積との一般的傾向」に関する叙述には「理論的重要性」を認めない。それを認めるのは、「集中と蓄積とが実現される際の事情と形態」についての叙述であり、「それらが導くはずの結果について」の叙述である。先のベルンシュタイン自らの要約中の語句を以て換言すれば、「無数の小資本家たちの殲滅」に関する叙述であり、労働者階級の『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する』状況に関する叙述である。このように、小資本家や賃労働者の窮乏化傾向の個所に焦点を絞って、この個所を第7節の集約点と看做したうえで、「現実の進化」がそこに叙述されていないような「新しい事実を成熟させてゆく」ことを以て、窮乏化傾向だけにとどまらず「問題の章の反論」とすることができる、というのが、ベルンシュタインの手法である。

カウツキーは、ベルンシュタインにたいする反駁の著、『ベルンシュタインと社会民主党綱領』において⁵⁾、マルクスの第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を幾度か問題にしている。しかしながら、彼においてもまた、この節において使用される概念、展開される論理そのものの分析はなされないままである。概念それ自体、論理そのものの吟味と解析とを抜きにして、この節の趣旨を総体として是認し、そのうえでカウツキー流の解釈を付加することによってこの節の趣旨の射程距離を拡張して、現実の裡に生起してくる種々の事例との不突合を回避しようと試みる——これが、カウツキーの姿勢である、といえよう。

例えば、この著作の第2章「綱領」の〔下〕

「窮乏説」と題した個所で、カウツキーは、次のような叙述を展開している。

『『崩壊説』とか『破綻説』とかいう言葉と同じように、『窮乏説』という言葉も、マルクス或いはエンゲルスから伝わったものでなく、彼等の思想の批判家から出たものである。／＼なるほどマルクスは、資本主義的蓄積の歴史的傾向を論じた章で、『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度』の増大を主張しているが、『しかしまた、たえず膨脹しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗』をも主張しているのである。／＼ところで、ベルンシュタインは、以上のことから結論としてマルクスはこの場合プロレタリアートの成熟さと勢力の増進を述べているのだとすることに、反対を唱えている。／＼『崩壊に関するマルクスの命題において、プロレタリアートの数、結合および訓練の増加を論じている章句が、果してプロレタリアートの成熟さと勢力の増進ということに翻訳しうるやいなやということは、プロレタリアートの成熟さと勢力の増進ということが、同じプロレタリアートの墮落と隷従の増加と合致しうるかということに懸っているのである。確かに私としては、つまらない言葉のアラ探しをしようとする気は毛頭ないのであるが、次のことだけは言って差しつかえなからう。即ち私にとっては、かような前提をなす場合、数、結合および訓練の増加——ここでは主として政治的訓練と解すべきである——と、成熟さと勢力の増進との間には、なほ一つ重大な区別、一時的勝利と永続的支配との区別に相応する一つ区別が存在していると。』（『フォアヴェルツ』4月21日号）／＼この引用された章句

の意味をハッキリさせるために、もしわれわれが『つまらない言葉のアラ探し』をしたとすれば、実際それはよくないことだろう。しかしその章句がそれ自らだけではどんなに瞬目なものであろうとも、それは800頁もある著作、即ち20年間以上の学問上及び政治上の活動の総決算をなすところの著作の末尾に書かれてあるのである。もしこの要約した彫刻術的命題を理解したいならば、言葉のアラ探しをせずに、マルクスの全活動と彼の著述の全内容を眼の前に持ってこなければならぬ。しかし、とりわけ、われわれは、現実の諸事実自体を考察してみなければならない⁹⁾。」

このカウツキーの文章中に引用されているベルンシュタインの主張をみると、一方では「プロレタリアートの数、結合および訓練の増加（A——引用者）を論じている章句が、果してプロレタリアートの成熟さと勢力の増進（B——引用者）ということに翻訳しうるやいなやということは、プロレタリアートの成熟さと勢力の増進（B——引用者）ということが、同じプロレタリアートの墮落と隷従の増加（C——引用者）と合致しうるかどうかということに懸っている」として、「崩壊に関するマルクスの命題」そのものの吟味と解析に立ち入る姿勢をみせながら、それと同時に他方では「数、結合および訓練の増加（A——引用者）と、成熟さと勢力の増進（B——引用者）との間には、なお一つ重大な区別が存在している」として、先の問題の検討を回避しつつ新たな設問の方向へと逸脱していくのである。換言してみると、 $\langle A=B \rangle$ が成立するか否かの鍵は、 $\langle B=C \rangle$ 成立するか否かにあるとして、Cを含む「崩壊に関するマルクスの命題」そのものを検

討するかのごとく装いながら、他方ではその検討を経ないままに $\langle A \rightleftharpoons B \rangle$ という結論を出してしまう——カウツキーの引用文中にみる限りでのベルンシュタインの姿勢は、このような問題回避のそれであるといえるようである。

カウツキーにも、問題回避の姿勢は抜き難い強さで存在する。一方では、「もしこの要約した彫刻術的命題を理解したいならば、……マルクスの全活動と彼の著述の全内容を眼の前に持ってこなければなるまい」と言う。その意味するところは、問題の第7節の概念と論理とを少なくとも『資本論』全体の概念と論理との比較対照のなかで、検討することの提唱であろう。だが、カウツキーの論陣はそこで前進を止め、俄かに別途へ転戦する。すなわち、上に引用した通り、「しかし、とりわけ、われわれは、現実の諸事実自体を考察してみなければならぬ」と言って、マルクスの命題の分析の作業ではなく、マルクスの命題の解釈の作業に入っていくのである。

「その考察をやってみると、『窮乏説』の説明の仕方には三つの仕方があり得ることがわかる。この三つは、互いに排斥し合うものではなくて、互いに補い合い、最も密接な関係にあるものである。

先ず第一に、この命題を、互いに相剋する二つの傾向——一つはプロレタリアートの下落、一つはプロレタリアートの向上を指す傾向——を現わすものと解釈し得る。けれども、この二つの傾向の対立は、資本家と賃銀労働者の対立自体にはかならないのである。資本家は、彼らの労働者をますます抑圧し、その労働時間を延長し、その賃銀を切り下げ、その隷従状態をさらに酷くしようとして、絶えず努力しているし、また競争の必要

上そこへ駆りたてられるのである。だがこれと同様に必然的に、おそかれはやかれ、奴隷化され抑圧されたが、生産過程それ自体によって結合され組織された労働者階級は、これに対して反抗する。——このことは実に、だれでも知っている現象である。しかるにいま自由主義経済学者がやって来て、こう説明する。なるほどそれは正しい、しかしプロレタリアートの窮乏化傾向は、資本主義的生産様式の一時的な初期の現象で、時の経つにつれて克服されるものである、と。——しかし、これは正しくない。克服されるものは、窮乏化傾向のあまたの結果であって、その傾向自体ではない。この傾向は、資本主義的搾取制度と不可分離に結合されているものであって、制度の撤廃によってのみ克服し得るものである。——……従って、ますます盛んになってきている、資本主義社会では根絶し難い一傾向という意味で、窮乏および隷従の増加ならびに反抗の増加という言葉は全く正しい。

だがしかし、なおもう一つの考え方が、事実と合致している。貧窮という言葉は、生理的窮乏を意味することが出来るが、なおまた社会的窮乏をも意味することが出来る。前者の意味での貧窮は、人間の生理的欲望によって計られ、勿論古今東西を通じて同一ではないが、到底社会的欲望ほどに大きな差異があるわけではないのであって、この社会的欲望の不足が、社会的窮乏を作り出すのである。……——ところで、労働者階級の生理的窮乏からの向上の過程が牛の歩みのように遅々たるものとすれば、既にそのことからして、彼らの社会的窮乏の増加が絶えず増進する結果になる。なぜなら、労働の生産性は並

々でなく急激に増進するものだからである。即ち以上の事実、労働者階級が己れ自ら創るところの文化の進歩からますます除外されること、ブルジョアの生活標準はプロレタリアートの生活標準よりも急速に向上すること、両者の社会的対立が増加するということを意味するにほかならない。／＼……

この命題は、なお第三の意味で解することも出来る。／＼われわれは、いままで、賃銀労働者階級を論ずるに留まっていたが、マルクスは、資本主義的蓄積の傾向に関する個所で、国民のうちの別の諸階級についても述べているのである。／＼……資本主義的工業によって新たに占領された領域では、そしてまたその限界領域では——ここでは『領域』という言葉は地理的意味と同じく経済的意味にとる——資本主義のこの窮乏化作用は、特に力強くかつ大きい、即ち社会的窮乏ばかりでなく、酷い生理的窮乏、直接の飢餓、必需品の欠乏、あますところのない頹廃を招くという具合に。／＼……資本主義的生産様式は、不断の進歩のなかにあるものであって、絶えず新しい事業部門と新しい地方とを占領し、そこで独立的小経営の所有者を壊廃せしめ、プロレタリア化し、窮乏のなかへ叩き込むものであって、この過程は、資本主義的生産様式自体と共にでもなければ、止まるところを知らないものである。なぜなら資本主義的生産様式は、その範囲を絶えず拡張することによってのみ生存し得るものだからである。』

このように、カウツキーにおいても、マルクスの命題に種々の解釈を加えて、現実のある局面との接合を図る企画は実行されながら、マルクスの命題そのものの再検討はついに果されな

かったようである。資本主義の消滅と社会主義の成立との必然性に関するマルクスの抽象的な規定のなかから窮乏化傾向に関する命題を抽出して、それと具体的な現実との突合によってその命題の当否を（そしてさらには第7節全体の論理の当否を）判定するという姿勢においては、カウツキーもベルンシュタインと軌を一にしているといわねばならない。ただ、天秤の一方の皿に乗せられるべき現実の事例が異なるだけだったと評しても、あながち妄評と謗りを受けることはないのではないか。

ベルンシュタインとカウツキーが、このように、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を取扱うにあたって、結論の方向は反対でありながら、思考の方法は同質であったという事情の背景には、マルクスにおいて既に揺曳していた方法的視点——つまり、資本主義の運動法則の論理的展開は同時に資本主義の生成・発展・消滅の歴史的発展と重畳するという考え方が、エンゲルスに至って増強され人口に膾炙し易い形で定着されたという思潮上の条件があると考えられる。ベルンシュタインについては、前出の彼のいわゆる「資本主義的生産ないし占有様式の歴史的傾向」の叙述のうちに、彼もまたそのような方法的視点に従っていることが示されていた。カウツキーについても既出の引用文の裡にそのような視点の存在を瞥見することも出来ようが、より明確には、例えば、ベルンシュタインの協力を得て著わされた『カール・マルクスの経済学説』（1887年）の最終章が「資本主義的生産様式の終末」Der Ausgang der kapitalistischen Produktionsweise と題されて、『資本論』の「資本主義的蓄積の歴史的傾向」と『反デューリング論』の「理論的概説」との抜萃から内容が構成されていることの裡に、示されて

いるといえよう⁸⁾。

- 1) Eduard Bernstein ; *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, 1899.

(邦訳, エドヴァルト・ベルンシュタイン『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』, 佐瀬昌盛訳, 1974年刊)。

- 2) 同上邦訳, 49—50頁。
- 3) 同上邦訳, 254—55頁。
- 4) 同上邦訳, 256—57頁。
- 5) Karl Kautsky ; *Bernstein und das Sozialdemokratische Programm*, 1899.
(邦訳, カール・カウツキー『マルキシズム修正の駁論』, 山川均訳, 1927年刊)。
- 6) 同上邦訳, 176—77頁。
- 7) 同上邦訳, 177—78頁, 178—79頁, 181—82頁, 193—94頁。
- 8) Karl Kautsky ; *Karl Marx' Ökonomische Lehren*, 1887.

レーニンの思索と受容

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」については、レーニンも関説したことがある。

例えば、『「人民の友」とはなにか』(1894年)におけるミハイロフスキー批判の際の言及が挙げられる。マルクスが『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』編集部への手紙を書く切掛となったあの同じミハイロフスキーである。

実は、『「人民の友」とはなにか』に触れる以上、筆者には是非とも逸してはならないと考えられることがある。それは、レーニンのいわゆる唯物史観に関する見解である。後世において常識として定着した見解と、鋭い対立をなし、正反対の立場を示す見解である。レーニン、時に24歳、いかなる思索の道程を経て、この見解に達し得たのか、そこに筆者は尽きぬ興味を覚えないわけにはいかない。

それはともかく、その見解とは、こうである。マルクスの『経済学批判』序文からいわれる唯物史観の公式といわれる部分を引用したのにつけて、述べる。「社会学における唯物論のこの思想は、すでにそれ自体で天才的な思想であった。もちろん、さしあたっては、これはまだ仮説にすぎなかったが、しかし、仮説にしても、それは歴史上および社会上の諸問題にたいして厳密に科学的な態度をとる可能性を、はじめてつくりだしたものであった¹⁾。」「ところで、マルクスは、1840年代にこの仮説を述べてから、材料の事實的(このことに注意せよ)研究にとりかかっている。彼は一つの経済的社会構成体——商品経済制度——をとって、膨大な資料にもとづいて(この資料を彼は25年以上も研究したのだ)、この構成体の機能と発展との法則のきわめて詳細な分析をあたえている。」「いまでは——『資本論』が出現してからは——、唯物史観はもう仮説ではなくて、科学的に証明ずみの命題である²⁾。』

唯物史観の命題と経済学=『資本論』との関係について、前者は仮説であり、後者によって論証されると言っている訳である。一般に常識的には、後者は前者によって基礎づけられ、前者を資本主義社会に適用したのが後者であると理解されてきた——「マルクス主義経済学の方法は、弁証法的唯物論の方法である。マルクス・レーニン主義経済学が土台としているのは、弁証法的唯物論と史的唯物論との主要命題を社会の経済制度の研究にあてはめることである」(ソ連科学アカデミー経済研究所『経済学教科書』³⁾)というのは、その端的な例——のとは、まさに対蹠的である。

当面の問題に帰って、レーニンの引用するところから、ミハイロフスキーの主張を窺うこと

にすると、ほぼ次のような形になる。

「ミハイロフスキー氏はつづける。『事物の歴史的行程の本質は、一般に補足されえないものである。経済的唯物論の学説は、見たところ二つの基柱に、すなわち生産および交換の諸形態のすべてのものにたいする規定的な意義の発見と、弁証法的過程の不可論駁性とに立脚しているけれども、この学説をもってしても、上の行程の本質はなお捕捉されない。』」

「ミハイロフスキー氏はマルクス主義文献を読んで、社会科学における『弁証法的方法』や、やはり社会問題の領域における『弁証法的思惟』等々に、たえずぶつかった。彼は天真爛漫の心から、この方法はすべての社会学的問題をヘーゲルの三段階法の法則によって解決することにある、と考えた。」

「ミハイロフスキー氏は、弁証法にこのような『批判』を加えた後、このようなヘーゲルの三段階法『による』証明の方法をマルクスになすりつけ、そして、もちろん、この方法にたいする闘争に勝利する。彼は言う、『未来に関しては、社会の内在的法則は、専ら弁証法的に設定されている。』収奪者は、資本主義の発展法則によって不可避免的に収奪されるというマルクスの考察は、『専ら弁証法的な性格』を帯びている。土地および資本の共有というマルクスの『理想』は、その『不可避免性および確実性』という意味では、専らヘーゲルの三項式連鎖の最終項のうえに保たれている。』⁴⁾」

ここから看取されるミハイロフスキーの主張は、資本主義の消滅と社会主義の成立との必然性に関するマルクスの論理は、ヘーゲルの三階

階法（「措定——否定——否定の否定という図式」）、就中三項式連鎖の最終項（「否定の否定」）に依拠したものだということにある。レーニンは、これに対して「この論拠はデューリングからそのまま取ってきたものである」と言い、「デューリングにたいしては、エンゲルスがみごとに回答を与えている」として、『反デューリング論』から数頁に互る引用を以て、反論としている。

したがって、ここではレーニンの見解そのものは分明でない。が、行論のうちで、レーニンは、例えばこう積極的見解を述べている。

「マルクスは、現代の体制を特徴づけ、それを評価し、非難するだけにとどまらないで、この体制を科学的に説明し、ヨーロッパおよびヨーロッパ以外のいろいろの国家で、いろいろに異なっているこの近代的体制を共通の基礎に、すなわち資本主義的社会構成体に還元し、この社会構成体の機能と発展との諸法則に客観的分析を加えたのである。（彼はこの体制のもとでの搾取の必然性を示した）。それと全く同じように、彼は、社会主義体制だけが人間の本性に合致するという主張——偉大な空想的社会主義者や、そのあわれむべき垂流たる主観主義社会学者たちはこう言ったのだが——に満足することを可能とは考えなかった。彼は資本主義体制の同じ客観的分析によって、その社会主義体制への転化の必然性を証明したのである。われわれが、マルクス主義者においてしばしば見る、必然を言いたてることの根源は、まさにここにあるのである⁵⁾。」

ここから、レーニンが、マルクスは「資本主義体制の同じ客観的分析によって、その社会

主義体制への転化の必然性を証明した」と考えていることは、明瞭である。そこから、第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を全面的に肯定していることが推測されるのである。そのことは、上のような理解に基づいて、否定疑問形の設問によって、ミハイロフスキーを批判する際の、設問の項目からも裏づけられるところである。

「ところで、ミハイロフスキー氏にたちかえろ。マルクスが、資本主義の発展法則そのものによって社会主義体制が不可避だという、その結論の基礎とした諸々の事実と考察とにたいして、彼はなんといって反論しただろうか。彼は、現実には——社会経済の商品的組織のもとでは——社会的労働過程の専門化の発展がおこなわれず、資本と企業の集積および全労働過程の社会化の発展がおこなわれないことを、示したであろうか。否、彼はこれらの事実を論駁するために、なに一つ指示するところがなかった。彼は、資本主義社会には労働の社会化とは和解しえない無政府性が固有である、という命題を動揺させたであろうか。このことについては彼はなにも述べなかった。彼は、すべての資本家の労働過程は一つの社会的労働過程に結合されることが私的所有と両立しうる、ということを証明したであろうか。また、マルクスが指摘した活路のほかに、この矛盾からの活路がありうるし、考えうるということを証明したであろうか。否、彼はこの点については、一言も述べていない。」

「資本と企業の集積」、「労働過程の社会化」、労働過程の社会的労働過程への統合、私的所有との不調和、等々が、マルクスの第7節「資本主

義的蓄積の歴史的傾向」(『資本論』)において駆使されている概念に類似していることは、改めて言うまでもない。ただ「労働の社会化とは和解しえない無政府性」という概念だけは、エンゲルスの「社会主義」第2章「理論的概説」(『反デューリング論』)に由来するものと考えられる。

こうして、レーニンにおいても、「資本主義体制の社会主義体制への転化の不可避性」は、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を全面受容し、「理論的概説」によって補完される形で、把握されていたのである。

そこから、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」について、その概念、その論理を吟味し解析する作業は、レーニンによっても、提起されることはないままに終わったようである。

ただ見落してはならないことは、レーニンが「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を受容するに際して、自己の頭脳による思索を経由したであろうということ、教義としてただ拳拳服膺するという姿勢ではなかったということである。それは、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの叙述において、資本主義に先行する封建社会が『自己の労働に基づく私有』という一面からのみ把握されていて、権力的関係による封建的束縛や共同体関係を通ずる土地との結合やの側面が捨象されていることを、レーニンは看破し、それへの言及を怠ってはいないからである。

「中世の経済制度のその他の諸特徴〔自己労働に基づく個人的所有以外の——編集者註〕は、ここでは無視されているが、それは、マルクスは資本主義的社会構成体だけを研究しているのに、それらは封建的社会構成体に属する、というまさにその理由からである。資

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論

本主義の発展過程は、その純粋な形では（たとえばイギリスでは）、現実には、分散的な小商品生産者の制度および彼らの労働に基づく個人的所有から始まったのである。」

この言及の内容については、筆者は必ずしも的確だとは考えない。その点は、後に検討の対象とする予定である。したがって、いまは言及の事実を指摘するにとどめておきたい。

こうして、自己の頭脳による思索を媒介にしてではあったが、24歳のレーニンは、マルクスの「資本主義的蓄積の歴史的傾向」における見地を受容したのである。そして、この点に関する限り、20年を経た後、44歳のレーニンにおいても、基本的には変更をみていない、といえよう。『カール・マルクス（略伝とマルクス主義の解説）』（1914年）において、「マルクスの経済学説」について、「歴史的に特定のある社会の生産関係を、その発生、発展、衰退において研究すること——これがマルクスの経済学説の内容である」と、資本主義の運動法則の論理的展開の裡に資本主義の「発生・発展・衰退」の歴史的変化をも説きうとする立場からの特徴づけを行なった後、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の項を設けて、マルクスの文章から、『直接的生産者の収奪は、全く仮借するところのない野蛮をもって、もっとも陋劣、醜悪、卑怯な憎むべき激情の衝動の下に、遂行される』に始まり『資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される』に至るまで、若干の省略を挟みながらも、一応資本主義の発生から終末までを覆う個所を、肯定的に引用しているのである。

1) 『レーニン全集』、第1巻、『「人民の友」とはなにか』。

2) 132頁、134頁、135頁。

3) ソ連科学アカデミー経済研究所『経済学教科書』合同新書版、11頁。

4) 159頁、161頁、165頁。

5) 153頁。

6) 175—176頁。

7) 177頁。

8) 『レーニン全集』、第21巻、『カール・マルクス』、47頁、52—53頁。

向坂逸郎の「窮乏化の理論」

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の叙述を重視し、その叙述を手掛りとして新しい社会への展望を闊達に展開したものとして、向坂逸郎の見解を逸することはできない。その見解の要旨を「資本主義的蓄積の一般的法則——いわゆる窮乏化論について——」に即して見てみたい¹⁾。

この論文においては、副題にもうかがえるように、いわゆる窮乏化法則が基軸を成している。ここでは、「マルクスは、『資本論』第1巻第23章『資本主義的蓄積の一般的法則』を論ずる冒頭で『本章では、資本の増加が労働者階級の運命におよぼす影響を取扱う』と述べている。『労働者階級の運命』、まさにこの問題の解明によって、社会主義は科学となったということが出来る」として、以下第23章第1節「資本構成の不変なばあいにおける蓄積に伴う労働力需要の増加」、第2節「蓄積とそれに伴う集積との進行中における可変資本部分の相対的減少」、第3節「相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産」に大体において添う形で議論が進められる。

「資本構成の不変なばあいにおける蓄積」については、『資本論』第23章第1節の記述の要約と引用とによって次のように述べられる。「蓄

積がもし資本の有機的組成を変化させないで進行するとすれば、蓄積とともに、可変資本部分は増大する。すなわち、賃銀に支出される部分は、それにしたがって増加する。労働力に対する需要がこのような増大するにしたがって、賃銀は高騰する。賃銀が高騰するにしたがって、剰余価値部分が減少する。もし『この減少が、資本を養う剰余労働がもはや標準的な量をもっては供給されなくなる点に触れるや、反動が始まる。資本化される収入部分は小さくなり、蓄積は衰え、賃銀の上昇運動は反撃を受ける。したがって労働価格の騰貴は、資本主義制度の基礎を侵害しないのみではなく、増大する規模におけるその再生産をも保証する限界内に閉じこめられている。……資本主義的蓄積の法則が実際に表現するところは、資本関係の不断の再生産と絶えず拡大される規模におけるその再生産とに重大な脅威を与えようような、労働の搾取度の低下または労働価格の騰貴は、すべて資本主義的蓄積の本性によって排除される、ということにすぎない』（『資本論』……）。ここでも、人間が、かれらの生産物を支配しているのではなく、生産物が人間を支配している。」次いで「可変資本部分の相対的減少」および「産業予備軍の累進的生産」については、『資本論』第23章第2節および第3節の記述の要約と敷衍とによって、次のような主張が展開される。

「労働賃銀の高騰が資本主義制度の限度に迫る危険は、蓄積の弛緩といういわば消極的な方法で排除される。資本はいま一つ、積極的な方法をもっている。……すなわち、資本蓄積の進行は、『社会的労働の生産性の発展が蓄積の最も強力な槓杆となる』ことに必ず結果するのである。労働生産性の発展は、資本の技術的組成の高度化によってもたらされる。これに相応し

て、資本の有機的組成も必ず高度化しなければならなくなる。すなわち、不変資本部分（機械、工場、原料等に表われる）に対する可変資本（労働賃銀に表われる）の比率は、相対的に減少する。」「資本の有機的組成の高度化は、不変資本部分に比較し可変資本部分を、たんに相対的にでなく、絶対的にすら減少させることができる。だから、かりに労働人口が停滞している場合、さらに絶対的に減少しつつある場合でも、可変資本部分を絶対的に減少する高度な技術の採用は、失業者を造出して、賃銀の高騰が『貨殖』という資本主義の限度を超えることを不可能にする。人口の絶対的な増減から独立して、いつでも『貨殖』を可能にする程度に賃銀を押える方法を、資本の蓄積過程そのものが含んでいるのである。だから、資本主義社会においては、産業予備軍は、蓄積の機構そのものから生じて、鉄の必然性をもって存在し、増加する。」

「資本蓄積の進行は、さらに資本の集中をつくりだす。資本主義的生産が発達し、蓄積が進行するにしたがって、『競争と信用』とが『二つの最も強力な集中の槓杆となる。』このことについて詳論する暇はないが、この作用は、いわゆる独占資本の支配をつくりだしてしまった。資本の集中は、競争によって弱小資本を滅し、合体し、信用によって散在せる資本を巨大な額に集中し、これを利用して独占を完成する。独占は生産規模を拡大して高度な技術を採用することができる。その市場支配は、巨額な独占利潤を、他のより弱い産業と、労働者階級の搾取の強化によって獲得する。失業者は、独占資本に滅ぼされ、抑圧されている中小の企業からも生れる。巨大なる独占資本への発展とともに、働く人間の失業の危険は、ますます増大する。」

「労働者階級の必然的窮乏化の法則」をほぼ以上のような形で展開した後、向坂は、「窮乏化論」の意義を次のように強調する。

「資本主義の発展による窮乏化の作用は、『資本論』によって、資本そのものの内在的機構としてはじめて理論的に証明された。マルクスは、しかし、窮乏化作用の中に、ただ、労働者階級の消極的な貧乏を見ただけではない。その窮乏が、新しい社会をつくる槓杆としてもつ意味を認識したのである。このことがなかったとしたら、『資本論』の人類史的意義は失われる。『資本論』を『資本論』たらしめている意義は、窮乏化作用の革命的な意義にあるのである。資本主義は、それ自身の法則によって、労働賃銀のその社会の限度を超える高騰を排除するとともに、不断にこれを押し下げる作用をなしている。このようにして作りだされる労働者の窮乏化は、今度は、資本主義そのものに反逆する力となる。ここに＜窮乏化論＞の本質的な点がある。」

このような向坂のいわゆる「窮乏化作用の弁証法」との関りで『資本論』第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」が引合に出される。向坂は、第7節の第6パラグラフ、つまり「この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実現される」という文章に始まり、「収奪者が収奪される」という一文に終るパラグラフのなかから、「この集中とならんで、……」以下を引用する。そのうえで、専らこの引用のなかでの「この転形過程のあらゆる利益を横領し、独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨脹しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組

織される労働者階級の反抗も、増大する」という文章に基づいて、自説を展開することになる。

まず、「反マルクシスト側からの批判」に関連して、こう述べる。「マルクスは、たしかに『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する』といっている。たしかに増大するであろう。しかし、この言葉を、たとえば、19世紀の初め以来今日まで労働者の『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度』つねに増大したことを実証しうる、とマルクスが考えているとして、こんなことはないから、マルクスの窮乏化論は間違っているというように批判する〔のは、当を得ていない——引用者補足〕。／＼マルクスは、この言葉の後にすぐつけて、『また、絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する』と述べている。この言葉の重要さを批判者たちは見逃している。」

これを発端として、向坂は、そのいわゆる「窮乏化作用の弁証法」について、言葉を重ねて自らの積極的見解を展開するのである。いまそれを列挙してみると、以下の通りである。

❶(A)「労働者階級が『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度』の増大に、ただ消極的にうち沈んでゆくだけのものであるならば、どうして革命階級であることができるであろうか。窮乏の労働者であるだけの労働者も、時として絶対的なモップとなることはあるかもしれない。しかしこのような人間には資本主義を変革し、新しい社会を建設することはできない。この歴史的使命をはたすためには、労働者は、社会主義を学ばなければならない。それはたんに生活体験としてだけでなく、学習されなければならない。理論として把握されなければならぬ。『資

本論』はそのために書かれている。『窮乏，抑圧，隷従，墮落，搾取』の増大に，身をまかせるだけの労働者が，どうして，たとえば『共産党宣言』を理解するか。マルクスもエンゲルスも，そんな馬鹿げたことを考えたことはなかった。エンゲルスが『イギリスにおける労働階級の状態』（1845年）にのべているところ，またマルクスが，『独仏年誌』（1844年）その他で説いているところは，社会主義の思想とプロレタリアートが結びついて，社会的変革が可能となるということであった。」

(B)「マルクスが，相対的過剰人口の諸形態についてのべているように，社会の底によんでいる泥沼のようなルムペンの窮乏，抑圧，隷従，墮落，搾取が，ないというのではない。このような泥沼は，資本主義の発展とともに増大している。しかし労働者階級を全体として見れば，『資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され，結集され，組織される』労働者は，量の上から増加しているだけでなく，その意識の上でも次第に高度になっている。もちろん，動揺しつつではあるが，労働者階級の政党も労働組合も発展してやまない勢を示しているではないか。したがって，労働者階級の反抗も増大しているではないか。……／＼なぜ社会主義政党や労働組合が，量の上でも意識の上でも発展し，労働者階級の反抗が増大するのであるうか。資本主義社会が窮乏化作用という基本的法則を含んでいるからである。私がこの節でのべたように，剰余価値の法則そのものが，労働者階級に対して，弱小の資本に対してと同様に，不断に窮乏化作用をおよぼしているからである。……／＼資本主義のこの運動法則を，その運動そのものとして理解するならば，それはつねに労働者階級を窮乏化し，抑圧し，隷従を強

い，墮落させ，搾取を強化する（たとえば労働の強度を増大することによって，あるいは絶対的相対的剰余価値の増大によって）。しかし，人間はただ法則に受動的であるだけでなく，能動的に反応する。動があれば反動があるということとは，社会においても運動法則そのものの本質である。社会における動に対する反作用は，人間の行為である。すなわち，実践である。』

(C)「独占的大資本の時代には，いつ誰が倒産し，いつ誰が失業するかわからない。社会は失業した人間の生存を保障しはしない。人口の圧倒的多数を占める働く人間の生活をつねに不安定にし，窮乏化する作用をいとなんでいる。また中小企業は，独占的大資本を前にしてなすべきすべを知らない。社会の諸所に絶望がある。／＼ただ，労働者階級だけは，独占大資本に抵抗する力をもっている。そしていまやそれを自覚している。『資本主義的生産過程そのものの機構によって，訓練され，結集され，組織された』からである。資本主義的生産の場所は，たとえば大工場は完全に計画された組織体をなしている。労働者は，この計画された組織体の要素として日常その中で労働している。交通機関はまた全国の生産活動を有機的に結びつけている。労働者は，このようにそれ自身として組織され計画されている。このそれ自身として組織され計画された状態を，意識した自主的な反抗の行為に押しつけてゆくのは，窮乏化の法則である。』

(D)「窮乏化の法則は冷い必然性をもって人々を強制する。労働者階級が絶望を知らないのは，窮乏化作用が，それ自身として組織された状態にある個々の労働者を，意識した自主的に『訓練され，結集され，組織される労働者階級の反抗』に成長させるからである。労働者階級をこ

のような階級につくりあげるのは、外ならぬ窮乏化作用そのものなのである。窮乏化作用の必然的な成果なのである。『資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗』の項点が、社会革命である。社会革命は、労働者階級の完全に意識的行為である。窮乏化作用を認識し、自主的にこの法則自体を止揚する行為である。必然の法則が、ここで自由な人間の実践に転化している。窮乏化作用がなかったら、これに反抗し、これを革命する人間の行為もない。窮乏化の法則そのものが、ここで自分自身を否定し、止揚する実践に転化している。この弁証法の理解なくして、窮乏化論の理解はありえない。したがってまた『資本論』の理解もない。』

(E)「資本主義の発展とともに『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取』の度が増大するという法則は、きびしい必然性をもって行なわれている。したがってまた『資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。』この二つの運動は、同一法則の両面なのである。『窮乏、抑圧、墮落、隷従、搾取の度の増大』の他の作用が、『労働者階級の反抗の増大』である。『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度の増大』が、もし一路進行して働く人間が死滅しなかったとすれば、それは、このような『増大』が『反抗』に転化されたからである。』

(F)「『反抗』の度合は資本家階級と労働者階級の『訓練され、結集され、組織される』力の関係が決定する。だから、窮乏化作用に対してどれほど大きな堤防を築くか、生存の不安定性をどの程度にとめるかは、反抗力の成長にかかっている。『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する』という作用の完全な運動をどこ

で止揚するか、それはもはや経済学だけの問題ではなく、政治の問題である。『資本論』は、このような政治の必然性を明らかにした。『聖家族』前後から『資本論』にいたるまでつづけられたマルクスの辛苦の思索は、この必然性の追求であった。」

以上、筆者は、向坂のいわゆる窮乏化法則の把握および「窮乏化作用の弁証法」の主張について、可及的忠実にその概要を纏めようと試みてきた。

向坂の見解を筆者なりに検討することは後述に譲って、ここでは、その見解の特徴について、二点ほど指摘しておきたい。

第一点の特徴は、資本主義の変革と新しい社会の建設との必然性に関する向坂の主張が、『資本論』第1巻第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」の記述を根拠とするいわゆる窮乏化法則と、第24章「いわゆる本源的蓄積」の第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の記述（より具体的には『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨脹しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって、訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する』という一文）を根拠とするいわゆる「窮乏化作用の弁証法」との統合から成っていることである。その点に、向坂における『資本論』の論理体系に関する理解の特徴が端的に反映されている。その特徴とは、資本主義的蓄積の論理の展開を究明した部分と、資本主義社会から新しい社会への転化、つまり歴史の発展を究明した部分が一直線に円滑に統合され得るものとして理解されているということであり、より一般的に言えば、『資本論』の論理体系を、資本主義の運動法則の論理的展開と資本

主義社会の歴史的発展との統一的叙述として理解するものといえよう。

第二の特徴として、向坂のいわゆる「窮乏化作用の弁証法」の具体的記述として引用した(A)～(F)においてみられるように、資本主義的生産関係から、資本主義に反抗し資本主義を否定する階級闘争が必然的に生みだされるという強固な確信が横溢していることを挙げたい。

無論のこと、細かく立ち入ってみると、資本主義的生産関係と階級闘争との関連についての向坂の論述は、単純一色ではない。上の引用のなかで(B)(C)(D)(E)のアンダー・ラインを付した個所、就中(E)の『『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度の増大』の他の作用が『労働者階級の反抗の増大』である』という文章に窺えるように、資本主義的生産関係から階級闘争がいわば自然発生的に産出されるかの如く説明する視点が一方にある。と同時に、他方では、(A)のなかで「歴史的使命をはたすためには、労働者は、社会主義を学ばなければならない。それはたんに生活体験としてだけでなく、学習されなければならない」と言われていること、マルクスやエンゲルスが明らかにしたこととして、「社会主義の思想とプロレタリアートが結びついて、社会的変革が可能となるということ」が挙げられていることなどに着目すると、そこには、資本主義的生産関係からの階級闘争の自然発生性を強調する視点でなく、社会主義的意識の外部注入の不可欠性を強調する視点が存在するように見受けられる。

このように向坂の論述には、二つの視点の存在が認められるのであるが、上に詳しく引用したところからも判るように外形的比較においてみて、第一の視点が優位に立っていることは、確かな事実であろう。そのことは、内容的に、

例えば、(F)のなかで、『『窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する』という作用の完全な運動をどこで止揚するか、それはもはや経済学だけの問題ではなく、政治の問題である』と、資本主義的運動法則と、これに抵抗しこれを否定しようとする政治的实践との次元の差が指摘されながらも、続けて『『資本論』は、このような政治の必然性を明らかにした』として、再び政治的实践が資本主義的運動法則の直接的反映に還元されている点に、窺い知ることのできる場所である。こうして、向坂のここでの議論全体にみられる特徴として、社会変革の政治的实践の独自の意義を重視するというよりは（それを無視する訳ではないが）、そのような政治的实践も資本主義的運動法則の展開の裡におのずから発生するものとして、資本主義的生産関係の内在的機構による階級闘争の自然発生性の強調を指摘しうるのであろう。

向坂によって、『資本論』が、「厳密なる科学の書」と同時に「最高度の階級闘争の書」としばしば強調されるのも、上と同様の文脈においてのことといえる。

向坂逸郎の考えに連なる人々における「資本主義的蓄積の歴史的傾向」論において、上にみたような考え方の特徴が、濃厚に投影していることを確認しておきたい。

川口武彦は、こう述べている。『『資本論』は第1巻の『資本主義的蓄積の一般的法則』のなかで科学的社会主義の精髓ともいべき論理をつぎのように展開する。『この転化過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数がたえず減少してゆくにつれて、貧困、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するが、しかしまた、たえず膨脹しながら資本主義的生産過程そ

のものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する。』——資本主義社会はその発展のなかに、その社会の偉大な墓掘人としての労働者階級とその階級意識とを育て、その団結をますます強化させてゆくのである。資本主義の発展法則とはその没落への道を示す法則でもある。」²⁾

(なお『資本主義的蓄積の一般的法則』とあるのは、明らかに『資本主義的蓄積の歴史的傾向』の誤りである——引用者)

「資本主義の発展法則とは その没落への 道を示す法則である」という理解の底流には、『資本論』における資本主義の運動法則の論理的展開が同時に資本主義の生成・発展・消滅の歴史的発展をも示すものとする視点が伏在すると考えられる。また、資本主義社会がその発展のうちに「墓掘人としての労働者階級とその階級意識とを育て」というのであって、経済的法則からの政治的実践の自然発生性を重視した見解であることは、明瞭であろう。

奥田八二の「『資本論』の経済思想」という文章においても、同様な特徴をもつ見解が示されている。この文章は、「一、マルクス経済学への道」として重商主義、重農学派、古典経済学を略観した部分と、「二、剰余価値論と資本の蓄積論」として、「1、マルクス経済学の方法」「2、剰余価値」「3、絶対的および相対的剰余価値の生産」「4、資本の蓄積」を略説した部分とから成る。そこで、「マルクス経済学の方法」として、例えば、こういう特色づけがなされる。「マルクスの経済学は、唯物史観によって資本主義社会を歴史的に位置づけし、そのうえに立って、剰余価値理論によって資本主義社会の生理を分析し、資本の蓄積すなわち資本主義社会の発展の必然性を、同時にその崩

壊の必然性を証明したものである。」「マルクスは、物化され、疎外され、その犠牲となっている労働者を、その窮乏化の極限において変革され、資本と闘うにいたる人間として発見する。そしてこの闘いが資本主義をおしつめ、崩壊させるものであるとの予見をさだめるのである。しかも、それは相闘う人間の関係であるが、同時に交換される商品(物)の関係として、したがって自然的必然性をもってつらぬかれるわけではないのである。」

そういう方法論的特色の具体的現われとして、奥田は、「資本の蓄積」に関して、次のような指摘をする。「資本の蓄積と集中は、相対的過剰人口または産業予備軍を蓄積する」と強調したのに続いて、「マルクスは、資本主義的蓄積に先行する本源的蓄積を、独立せる小生産者からの生産手段の暴力的収奪および生産手段を奪われたかれらの賃労働者への強制的訓練として論じたのち、『資本主義的蓄積の歴史的傾向』として、つぎのようにむすんでいる」と述べて、第7節の第5および第6の параグラフ全体を引用する。この引用部分に、向坂によって、また川口によって重視された一句「窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する」が含まれていることは、いうまでもない。しかも、この引用は、「経済科学の任務は、新たに現われつつある社会的弊害が現存の生産様式の必然的結果であると同時に、またこの生産様式の分解がせまっている所でもあることを立証し、そしてこの分解しつつある経済的運動形態の内部に、そういう弊害をとりのぞくべき将来の新しい生産および交換の組織の諸要素を見つけだす

ことである」(『反デューリング論』第2篇「経済学」第1章「対象と方法」)という「エンゲルスの言葉との関連において」行なわれているのである。

このような見解にはひとつの特徴として、『資本論』を「資本主義社会の生理を分析し」「同時にその崩壊の必然性を証明したもの」とする考え方、つまりそこで論理的展開と歴史的発展との同時的把握がなされているという理解があることが明らかである。また、いまひとつの特徴として「相関する人間の関係」が「交換される商品(物)の関係として」「自然必然性をもってつらぬかれる」とする見方、つまり政治的実践を経済的法則からの自然発生的現象として理解する視点が明瞭に看取されよう。

ほぼ以上のような形において、第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」は、そこで展開されている論理そのものは吟味されることのないまま是認され、その一部分だけが抜き取られて、第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」におけるいわゆる窮乏化の法則の命題と接合されることによって、資本主義の社会主義への転化の必然性を示す重要な一節として評価され、流布され、定着していく。そして、マルクス関係の文献を読む人の最初にかつ最深に印象づけられる命題となっていく。ここで、筆者は、向坂とその流れを吸むと考えられる人々を例にとったのであるが、このような評価は、決してこれらの人々にのみ特有なものではない。むしろ、いわゆるマルクス経済学の研究や学習に携わる人々には一般的な評価だというのが、実情に近いであろう⁴⁾。そういう思想的潮流の一典型として、向坂たちは、位置づけられるであろう。

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」における論理が、一般社会に受容されてゆき、一種の常識として定着していった状況を端的に示す例として、多少場違いの感を抑えて、ある小説の一節を引きたいと思う。昭和の初期、旧制高校、大学において、社会主義運動に従事し、やがて転向を強いられた青年の口を借りて、このような言葉が述べられる。「実際にやっていた行為は、ガリ版でビラを刷り、それを学生に撒いたり、依頼された連絡を、あちらの工場からこちらの町角へと果しにいく程度にすぎませんでした。私はその行為が大変革につらなっており、大正義の実践に資しているものと信じました。皮肉なインテリはマルクス主義を知識人最後の宗教などと言っていますが、私に関してだけなら、そうであったと言っていいと思います。資本主義の成長が資本の独占をうみ、中産階級を没落させ、階級対立を激化させ、やがてそれ自体のはらむ矛盾の爆発によって、あらたな体制に進まざるをえなくなるという理論については何も言うことはない。ただその過程を自覚し自覚的に破壊する自己犠牲的な前衛の存在を説く論理が私の気持をかき立てました。しかし大学の二回生の時に検挙され、四カ月ほど未決監に入れられて、私はその大論理が、自分の日常の倫理とほとんど結びついていなかったことを悟らされました。今日なにに生甲斐をかんじ、明日なにを自分の喜びとするのか。自己自身をどういうふうに完成させようとしているのか。無理に無理を重ねて、かきたてていた自己英雄視と自己陶醉が醒めたとき、私には歴史を鳥瞰する論理の知識はあっても、日々の感情をささえるなんの支えもないことを知りました。」(傍線、引用者)

1) 向坂逸郎『マルクス経済学の基本問題』、1962年

刊, 331—61頁。引用は、すべて 347—61 頁の「窮乏化の理論」からである。

- 2) 川口武彦『『資本論』から何を学ぶか』(荒牧正憲・内田勝敏・他訳『資本論抄』, 1969年刊, 所収) 20頁。

- 3) 奥田八二『『資本論』の経済思想』(奥田八二・徳本正彦『近代社会思想史』, 1964年刊, 所収) 101—16頁。

4)

○「資本主義的蓄積の歴史的傾向」については、日本においても、多数の『資本論』解説書あるいは研究書において言及がなされている。そして、そのほとんどは、マルクスの展開した論理を再生産するだけに終わっており、精々のところで、そこでの論理に適合的な事例の紹介を加えたり、「資本の集中」「資本独占」との関連でいわゆる独占資本に関する記述を付加するという形をとっているにすぎない。マルクスの展開した論理やそれを支える概念やについての分析を試みたものは皆無に近い。

○そのなかで、例外をなすものとして、次の二つが挙げられよう。

宇野弘蔵「所謂原始的蓄積」(『資本論入門』, 1948年刊, 所収) 164—79頁, とくに172—5頁。

桜井 毅「崩壊の必然性について」(宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅱ, 1967年刊, 所収) 210—14頁。

○一般的存在の例として、管見のかぎりでは、次のようなものが挙げられよう。

河上 肇「資本家の蓄積の史的傾向」(『資本論入門』, 1932年刊, 所収) 1104—18頁。

山田勝次郎「謂わゆる本源的蓄積と近代的植民論」(『マルクス資本論』, 1936年刊, 所収) 197—203頁。

杉原四郎「資本蓄積法則」(杉原四郎・三谷友吉編『マルクス経済学』, 1960年刊, 所収) 93—105頁, とくに103—51頁。

古川 哲「資本主義的生産様式の基本的矛盾」(『マルクス経済学講座』, I『マルクス 経済学入門』, 1963年刊, 所収) 134—7頁。

長洲一二・正村公宏「資本主義の発展」(『経済学入門』上, 1965年刊, 所収) 163—93頁, とくに172—6頁。

堀 晋作「資本主義的蓄積の歴史的傾向」(『マルクス経済学体系』I, 1966年刊, 所収) 222—6頁。

宮本義男「資本主義的蓄積の歴史的傾向」(『資本

論入門』上, 1966年刊, 所収) 265—7頁。

遊部久蔵「資本主義的蓄積の一般的法則」(『マルクス経済学』, 1968年刊, 所収) 204—7頁。

服部文男「いわゆる本源的蓄積と資本主義的蓄積の歴史的傾向」(『マルクス主義経済学講座』, 上『資本の生産過程』, 1971年刊, 所収) 283—301頁。

吉原泰助「本源的蓄積と資本主義的蓄積の歴史的傾向」(『新マルクス経済学講座』, 第1巻『マルクス経済学入門』, 1972年刊, 所収) 154—161頁。

平田喜久雄「資本主義的蓄積の一般法則」(『資本論研究入門』, 1973年刊, 所収) 228—9頁。

富塚良三「本源的蓄積」(『経済原論』, 1976年刊, 所収) 167—196頁, とくに193—6頁。

鶴田満彦「本源的蓄積」(山中・鶴田・吉原・二瓶著『マルクス資本論入門』, 1976年刊, 所収) 107—114頁, とくに110—14頁。

○「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の最後の方にあるマルクスの「否定の否定」「個人的所有の再建」の命題に独特の読み込みによる新解釈を加えたものとして、平田清明『市民社会と社会主義』1969年刊, 「フランス語版『資本論』の意義, 一とくに本源的蓄積篇をめぐる一」(『経済学と歴史認識』, 1971年刊, 所収) がある。それに通説的立場から批評を加えたものとして、林直道「平田清明氏の個体的所有論」(『史的唯物論と経済学』下巻, 1971年刊, 所収) がある。また、この論争の主題となった「個人的所有」の概念に分析を加えてその論理的不備を指摘したものとして、刀田和夫「いわゆる個人的所有について」(『唯物史観』第13号, 1974年) を逸することはできない。

- 5) 高橋和巳『邪宗門』上, 1966年刊, 196頁。

宇野弘蔵による批判的検討

1.

『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」については、次のような見方が一般的であった。つまり、この節が、資本主義的生産関係をその成立・発展・消滅において究明した、『資本論』の白眉をなす部分であり、資本主義の経済的運動法則と社会主義的変革の必然性を、論理と歴史との統一として把握

している典型的な箇所である、と。そして、そのような見方を支えているものとして、次のような姿勢が一般的であった。

つまり、第7節でマルクスが展開している論理そのものを具体的に解析することはしない、『資本論』全体の論理とこの第7節の論理との関連についての検討は曖昧な形で放置している、そのうえでマルクスの文章を一字一句動かすべからざるものであるかのようにいわば聖典視し、さまざまな読み込みによる解釈を加えることで能事足れりとする。

そのような見方と姿勢とは対蹠的に、第7節にたいして根本的な疑問と論理的な批判とを提起したのは、おそらく宇野弘蔵が最初であろう。無論、素朴な疑問、感覚的批評ということであれば、デューリングやベルンシュタインやミハイロフスキーなどの例があることは、先に関説したとおりである。だが、『資本論』全体の理論的性格を基底において組織的分析をなし、この一節の主張の難点をその核心において摘出したのは、やはり宇野をもって嚆矢とするといえよう。

そういう宇野の仕事は、相当長期にわたって数本の作品として存在しているが、ここでは、そのうち、宇野自身の言葉を借りると「この節をとりあげて詳細に考察し、社会主義と経済学との関係についての私の考えを述べてみた」とされる「社会主義と経済学」を中心的素材として採りあげることとする。この論文は、『資本論』第1巻第24章第7節の「全文」をあげてその疑問点を指摘し、マルクスの志向の実現に関して経済学のあるべき方途を示唆したものといえよう。そこでの問題は広大であり、論点は多岐にわたるので、遺漏や誤読による不十分性を免れないことをおそれつつも、以下、そこでの

宇野の議論を筆者なりに取り纏めてみたい。

(以下、特に付記しない限り、「」は宇野「社会主義と経済学」よりの引用、『』は『資本論』第24章第7節よりの引用である。)¹⁾

宇野の議論は、人間社会の歴史に一般的に妥当するものとして与えられている、いわゆる唯物史観と、直接には人間社会の歴史の一部たる資本主義社会を対象とする経済学との関係について、自説を再確認するところから着手されている²⁾。

周知に近いことながら、唯物史観の公式と呼ばれるものは、マルクスの『経済学批判』の「序言」のなかに与えられているものであって、そこには、(1)物質的生産力の特定の発展段階に対応した生産関係の総体(＝社会の経済的構造)が社会の「土台」であり、法律や政治や社会的意識形態は、この「土台」に制約されつつそのうえにそびえたつ「上部構造」であること、(2)社会発展の動力は物質的生産力の発展にあり、それが既存の生産関係を桎梏とするに至ると、「社会革命の時期」つまり「経済的社会構成の前進」が始まること、の二つの命題が含まれている。そして、これらの命題を軸とする唯物史観と経済学との関係については、従来、後者は前者によって基礎づけられ、前者を資本主義社会に適用したのが後者である、とする理解が常識化していた。

それにたいして宇野は、「資本主義社会という特殊の一歴史的社會を対象とする経済学の原理論が、唯物史観にいわゆる上部構造に対して、その現実の土台をなす経済的過程をそれ自身に運動するものとして説明することによって、唯物史観を科学的に基礎づけたものと理解し」「それと同時に唯物史観にいわゆる生産力と生産関係との矛盾の展開も、恐慌論として解

明されるべきものであって、直ちに資本主義社会の変革の過程としてではない、という見解をとってきたのである。」

『資本論』第1巻第24章第7節は『資本主義的蓄積の歴史的傾向』として社会主義的変革の必然性を説くのであるが、上のような見解に立つ宇野にとって「それは何としても私の納得しえないものである」ということになるのは、当然であろう。ここに宇野をして「今一度この節をとりあげて詳細に考察し、社会主義と経済学との関係についての私の考えを述べてみたいと思う」と発言せしめる動機が根ざす。「理論的に反駁を許さないような体系を完成してゆくところこそ、マルクス経済学を真に擁護することであり、また社会主義を真に基礎づけるものと…考えている」（『経済学方法論』序³⁾）宇野は、マルクスの論理を首尾一貫したもの、疑問の余地なく明確なものに近づけるべく、そうでない部分——首尾一貫しない部分、疑問の余地があり、不明確な点を残す部分を剔抉していく。

2.

そういう作業のなかで提起された疑問のなかで、最も明瞭な判別し易いものとして、マルクスの「生産様式」という言葉の使い方における不確実性の指摘がある。

封建社会から資本主義への、資本主義の発生過程を考察するにあいには、マルクスは、『労働者が彼自身の扱う労働諸条件の自由な私有者である』ような『小経営』を対象として採りあげて、『この生産様式』について、次のような規定を与えている。『この生産様式は、土地と、その他の生産手段の分散を前提する。それは、生産手段の集積を排除するとともに、同一生産過程の内部における協業と分業、自然に

たいする社会的支配と規制、社会的生産諸力の自由な発展をも排除する。それは生産と社会の狭隘な自然発生的な限度とのみ、調和する。これを永遠化しようと欲するのは、ペクルが正しく言っているように、＜一般的平凡を命令する＞ものであろう。一定の高度に達すれば、それは、それ自身の破壊の物質的手段を産み出す。この瞬間から、社会の胎内では、この生産様式を桎梏と感ずる力と熱情とが動き出す。この生産様式は、破壊されねばならず、破壊される。』このような小経営とその生産様式の滅亡に関するマルクスの規定について、宇野は「ここでは唯物史観にいわゆる生産関係が『生産様式』とせられ、その生産力の発展が『生産様式』そのものと矛盾することになっている」ことを指摘する。

他方、資本主義から社会主義への、資本主義の消滅の過程に関するマルクスの規定は、その大略の筋道を追うと、次のようになっている。

『資本主義的生産様式が自己の足で立つにいたれば、労働のさらにそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の、社会的に利用される、したがって共同的な生産手段への、さらにそれ以上の転化、したがって、私有者のさらにそれ以上の収奪は、一つの新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。／＼この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則的作用によって、資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多く多くの資本家を滅ぼす。……資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本

主義的所有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。』このような資本主義的生産とその結果に関するマルクスの規定について、宇野は次のように指摘する。「資本主義的生産の発展過程では、前とは逆に生産様式を唯物史観にいわゆる生産力の地位におくことになる。それは資本主義的私有を生産関係とし、一定の発展段階でこれと矛盾するようになる、社会的生産としての生産様式というわけである。」「『生産手段の集中と労働の社会化』としての『生産様式』が、『その資本主義的な外皮』としての『資本独占』と『調和しえなくなる一点に到達する』というのである」と。

生産力はその一定の発展とともに生産関係と矛盾して、新たな生産関係を展開することになるという唯物史観の規定が、この第7節では、まず小生産者の生産様式について、生産様式が生産関係と等置されて、生産力と生産様式の矛盾として説かれ、次いで資本主義的生産様式について生産様式が生産力に等置されて、生産様式と生産関係の矛盾として説かれている。誰にも認められるところであろう。資本主義の発生過程について、どうして生産関係と言わずに生産様式という用語を用いたか。資本主義の消滅過程について、なぜ生産力に代えて生産様式という言葉を用いたか。当然にこういう疑問が、次に登場しなければならない。

この疑問について、宇野は、別の文章（「マルクス主義とは何か」）において、次のような考え方を示している。「独立の小生産者の生産関係というのは、商品交換関係としてしか現われないということがマルクスをして生産関係という言葉の代りに生産様式という言葉を使わしたのではないかと、私には推測されたのである。しかしそれがために生産力と矛盾するこの

生産様式は、その矛盾の展開過程を明らかにされないままで」終ったのではないかと。また次に現われる資本主義的生産様式では「先きの小生産者の生産関係を生産様式としたために、これに対する社会的生産の方法（生産の方法 Produktionsweise は『生産様式』とも翻訳される——引用者）を生産力として資本家的生産関係に矛盾するものとしたのではないかと考えられるのである。ここでもまた矛盾の展開過程自身は解明されない」と⁴⁾。

つまり、こういうことであろう。マルクス自身、『小経営』について、この節で『この生産様式は、奴隷制度、農奴制度、その他の隷属的諸関係の内部にも存在しはする。しかし、それが繁栄し、全精力を発揮し、適切な典型的形態を獲得するのは、労働者が彼自身の扱う労働諸条件の自由な私有者であるばあい、すなわち農民はその耕す耕地の、手工業者は彼が老練の腕をもって振う用具の、自由な私有者であるばあいのみである』と、明記しているところからも知られるように、『小経営』は奴隷制、農奴制、その他の社会制度それぞれの生産関係とは特有な緊密な結びつきを有しないものとして、むしろそれぞれの生産関係に共通なものとして、理解されている。そこに、マルクスが「生産関係」という表現をとりえず、「生産関係」よりも一段と広義でそれだけ内容の稀薄な「生産様式」という表現を用いた理由が存在するのではないかと。また、それゆえに、「生産様式」という言葉があるときは唯物史観にいうところの「生産関係」に擬し、別のときには「生産力」に代えるという恣意的使用に道を開くことにもなったのではないかと。

3.

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの主張にたいする疑問の第二は、封建社会から資本主義への資本主義の生成過程の解明に際して、『自己の労働に基づく私有』を前提とする『小経営』から構成される世界（いわゆる単純商品生産社会あるいは小生産者の世界）が想定されていることに、向けられている。それは、上にみた「生産様式」という言葉の使い方の問題が、たんなる言葉の問題にとどまらない性格のものであったこと、その「生産様式」という言葉の起用が『小経営』の世界の想定と結びついていたことから言っても、当然の疑問といえよう。

この第7節の冒頭において、資本主義の生成過程について、マルクスはこう自問自答している。『資本の本源の蓄積、すなわち、その歴史的生成は、いかなることに帰着するか。それが奴隷と農奴の賃銀労働者への直接転化、したがって単なる形態転換でないかぎりには、直接生産者の収奪、すなわち自己の労働に基づく私有の解体を意味するにほかならない。』この節の資本主義の生成過程に関するマルクスの叙述は、次のような一文で結ばれている。『自己の労働によって得られた、いわば個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有は、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有によって駆逐される。』この両文章の間には、先に引用した『生産手段の集積を排除するとともに……、社会的生産諸力の自由な発展をも、排除する』小経営としての生産様式が、『この生産様式を桎梏と感ずる力と熱情とが動き出す』ことによって『破壊されねばならず、破壊される』旨の叙述があって、この『破壊』が、具体的には『個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への

転化、したがって多数な人口の矮小所有の、少数の人の大量所有への転化、したがって民衆の大群からの土地と生活手段と労働用具の収奪』である、という規定によって再確認されている。

このようにマルクスは、資本主義の生成を一方では『直接生産者の収奪』による『個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化』の過程として規定し、他方では『自己の労働に基づく私有の解体』、『個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有が、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有によって駆逐される』過程として規定している。

こうしたマルクスの規定について宇野が指摘する点は、資本主義の生成過程は「単なる『直接生産者の収奪』というのではない」『形態転換』の側面を含有するということである。宇野の指摘は、直接には第7節冒頭の一文に関連している。ここで、マルクスが『奴隷と農奴の賃銀労働者への直接転化』を『単なる形態転換』とし、しかもそうで『ないかぎり』は、という限定を置いて『資本の原始的蓄積』を『直接的生産者の収奪』と規定していることにたいして、宇野は、「この節におけるマルクスの『資本主義的蓄積の歴史的傾向』の考察にとって極めて特徴的な点である」として、より具体的にこう言う。『『直接生産者の収奪』という実質的变化も、『奴隷』はとも角として、『農奴の賃銀労働者への直接転化』としての『形態転換』の内に含まれるものとしてこそ『歴史的傾向』の考察といえるのではないか。マルクス自身、労働力の商品化を説くにあたっては、いわゆる二重の意味での自由を前提しなければならないことを明らかにしている。それは単なる『直接生産者の収奪』というのではない。いいかえれ

ばこの『収奪』にさきだつ『直接生産者』の世界は、単に『自己の労働に基づく私有』制の下にあるものとはいえないのである。マルクスの、この節における展開は、いわゆる単純商品生産の世界を想定して始められているといってもよいであろう。」

この宇野の見解は、否定形を積み重ねた消極的表現で綴られているため、文意を読解するのが必ずしも容易でない面があるように思う。いま筆者の理解に引き寄せてではあるが、宇野の含意を積極的表現を用いて換言し補足しておく。

マルクスが、この第7節の冒頭で『資本の本源の蓄積』を説くにあたって『農奴の賃銀労働者への直接転化』を『単なる形態転換』としたうえで、『単なる形態転換でないかぎり』として、『直接転化』を考察の対象から除外していることは、＜『農奴』→『小経営』→『賃銀労働者』＞という経路、つまり単純商品生産者・小生産者としての『小経営』を媒介項とする変化の道筋に考察の対象を限定することを意味する。このような独立した『小経営』からなる世界の想定は『資本論』の全体の論理に背馳するものではないかという点については、後にマルクスをしてマルクスを批判せしめる形で検討することにして、今は次のことだけに言及しておく。封建社会から資本主義への過渡期に、このような小経営階層が広汎に一般的存在として見出されるか、散発的例外的存在にすぎないかという歴史的事実を巡る問題は、従来しばしば論議されてきたところであり、なお論議されているものである。だが、ここでの問題の焦点は、小経営の存在の多少・広狭に関する史実の質量的側面の探究にあるというよりは、これらの直接生産者が封建的束縛の下に置かれている

のではないか、商人資本の支配に服しているのではないか、等々の形態的側面の考究にある、と考えられる。したがって『直接生産者の収奪』というのも、直接生産者たる農民と土地との共同体的結合と経済外強制による彼らの土地への緊縛との解除による、二重の意味で自由な労働力の形成——封建的束縛から自由であるとともに生産手段から自由な労働者の創出という『形態転換』のなかで遂行されるのである。「単なる『直接的生産者の収奪』というのではない」と宇野が言う意味は、ほぼ以上のようなことだと思われる。その点を、宇野自身、別の文章（『修正派ベルンシュタインの主張に対するカウツキーの正統派的反駁について』）において、より積極的にこう述べている。「『本源の蓄積』は、封建的諸関係の下にあった『小経営』が、旧封建関係に代る近代的国家の政治的権力の下に、商人資本的に収奪される過程として規定されているのであって、これを単なる『小経営』の資本家の経営への転化とするのでは、その真相はつくされない」と⁹⁾。

このように生産関係の『形態転換』の面が看過されるとき、生産力の質量変化の面が不均衡に重視されることになる。この節で、資本主義の生成が、資本・賃労働関係の形成という生産関係の面は後景に退き、『個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化』という生産力の面が前面に立つ形で把握されているのは、その端的な表われといえよう。宇野は、マルクスのこのような把握について、「商品経済的に一面的な抽象性を思わざるをえない」と批判することになる。

4.

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」における資本

主義から社会主義への資本主義消滅過程論にたいする宇野の難点指摘は、搾取論の収奪論への吸収、恐慌論の崩壊論への解消にある。

マルクスは、資本主義的生産の発展過程について、こう言う。『労働者がプロレタリアに、その労働諸条件が資本に転化されれば、資本主義的生産様式が自己の足で立つにいたれば、労働のさらにそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の、社会的に利用される、したがって共同的な生産手段への、さらにそれ以上の転化、したがって私有者のさらにそれ以上の収奪は、一つの新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。』これにたいして、宇野は、資本主義的生産は「労働者の労働の搾取関係による資本の蓄積を基本とするのであって、『多くの労働者を搾取しつつある資本家』の『収奪』は、一般的にはその裏面をなすものとしなければならない」と批判する。資本主義が、本源的蓄積の過程において労働力の商品化を達成し、その前提のうえで資本・賃労働関係を展開するものであれば、搾取関係（資本が、一日の労働力を商品として購入して生産を行なえば、労働力の代価として支払う価値を超過する価値つまり剰余価値を、労働力の使用価値としての一日の労働によって得ることができるという関係）が、基本的関係を成すことに疑問の余地はない。

『資本論』の構成をみても、第3篇「絶対的剰余価値の生産」で搾取関係の成立根拠を説き、第4篇「相対的剰余価値の生産」で搾取関係の拡充方法を明らかにしている。財産を強制的に取りあげるという収奪関係は、『労働者がプロレタリアに』転化している資本主義においては、副次的関係以上のものとして存在するは

ずがないのである。『資本論』の構成をみても、資本主義の生成を扱った第24章「いわゆる本源的蓄積」以外に、資本主義の発展のなかにおける収奪を本格的に扱う部分はないのである。こうして、「搾取関係に対して収奪関係を主題」としているという宇野の批判は、重要な問題提起といわねばならず、マルクスの論理展開において、なぜ、そのような偏倚が生じたかが改めて検討されなければならないだろう。

この収奪関係の進行について、マルクスはこう続ける。『この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多く、多くの資本家を滅ぼす。』この過程の究極については、こう言われる。『資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。』

この部分についての宇野の指摘は、次の通りである。「先に述べたように資本家と労働者との搾取関係に基づく、資本の一般的な蓄積過程による資本主義的生産様式の発展が、『少数の資本家による多数の資本家の収奪』としての『資本の集中』過程の蔭にかくれている」ということで、蓄積過程論の集中過程論による封殺という問題がひとつ。さらに「かくて資本主義社会における生産力と生産関係との矛盾は、資本自身の矛盾としてでなく、資本に対する社会的生産力としての生産様式の矛盾として、いいかえればそれは資本が自らその矛盾を現実的に解決しつつ発展する動力として有しているというのではなく、生産力が資本自身を根本的に否定する

対立物として有していることになる。」したがって「ここで資本主義的生産の矛盾の発現が、恐慌としてでなく、その変革として説かれるということは『資本論』の理論的展開に極めて重要な影響を及ぼすことになる。恐慌論は、いわゆる崩壊論の内に吸収される傾向をもつことになるのであった」という問題がひとつ。蓄積論と集中論、恐慌論と崩壊論、ここにも『資本論』の論理体系そのものにたち帰って、改めて検討すべき主題が存在するといわなければならない。

5.

この一節において、マルクスは、収奪関係に基づく資本の集中過程で、上にみたような『生産手段の集中と労働の社会化』の反面として『労働者階級の反抗』が増大することを、次のように説いている。『この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨脹しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。』かかる過程の進行が、『収奪者が収奪される』事態の招来と繋げて考えられていることは、いうまでもあるまい。

このマルクスの規定にたいして、宇野は別の文章（「修正派ベルンシュタインの主張に対するカウツキーの正統派的反駁について」）において、次のような考えを明らかにしている。『資本論』第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」第4節「相対的過剰人口の種々の存在形態。資本主義的蓄積の一般的法則」における「屢々問題とせられてきた、いわゆる窮乏化法則に関するマルクスの規定」を採りあげ、「ここでは、

……第24章第7節の一句と異って、資本の集中に伴う労働者の窮乏と共に『資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され組織される労働者階級の反抗も増大する』という規定は与えられていない」ことを手掛りとして、「問題は、したがって一方における窮乏化の増進と、他方における『組織』と『反抗』の増大とが、同じような論理的展開をもって説かれているか、否かにある」と問う。宇野の答えは、同じ論理的展開の内に解明されうるものでないというものであって、すなわちこう述べる。『「収奪者が収奪される」過程は、『資本主義的生産自体の内在的法則の作用』としての『資本の集中』の場合のように、『少数の資本家による多数の資本家の収奪』の過程ではない。それは労働者階級による資本家階級の、大衆労働者による少数資本家の収奪であって、資本家の生産方法そのものを止揚する過程である。『資本主義的生産自体の内在的法則の作用』をもって解明されるというものではない。この収奪の過程の前提をなす、労働者階級の『訓練』や『組織』が、資本の蓄積による集積の増大、集中の過程の内に必然的になされるのではない。また、たといかかる『訓練され結集され組織される労働者階級の反抗が』増大したとしても、資本家階級の側でもこれに対応する法律的・政治的等々の抵抗があるわけであって、その関係は単なる経済法則をもってしては片付けえないものである。マルクスの場合は、その間の関係が不明確なまゝいわゆる弁証法をもって唯物史観の公式通りに片付けられているのである。』⁹⁾

ここで、宇野は、『組織』と『反抗』の増大の過程や『収奪者が収奪される』過程は、政治的実践運動を抜きにしては存在しえないものであり、「単なる経済法則をもってしては片付けな

いものである」ことを強調している。その意味で、先にみた向坂逸郎に代表されるような考え方——「窮乏化の増進」と『労働者階級の反抗』とについて、前者からの後者の発生の必然性を強調する考え方、経済法則の作用のうちに政治的実践の生成を確信する考え方——との間に、大きな差異を認めねばならない。その差異のもつ意味も、改めて検討されねばならない重要事であろう。

6.

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の議論についての宇野の難点指摘は、いまひとつ、「労働に基づく私有」を巡るものがある。

マルクスは、この第7節での資本主義の生成・発展・消滅に関する規定を、最後の二つのパラグラフで次のように総括している。

『資本主義的生産様式から生ずる資本主義的領有様式は、したがって資本主義的私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。しかし資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を産み出す。それは否定の否定である。この否定は、私有を再興するのではないが、しかしたしかに、資本主義時代の成果を基礎とする、すなわち、協同と土地および労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする個別的の所有を再興する。——言うまでもなく、個人の自己労働に基づく分散的私有の資本主義的私有への転化は、事実上すでに社会的生産経営に立脚する資本主義的所有の社会的所有への転化に比すれば、比較にならないほど長く、苛酷で、困難な過程である。前のばあいには、少数の篡奪者による民衆の収奪が行なわれたのであるが、後のばあいには、民衆による少数の篡奪者の収奪

が行なわれるのである。』有名な『否定の否定』の論理である。この規定に先だって、資本主義の生成について、『直接的生産者の収奪、すなわち自己の労働に基づく私有の解体を意味する』という規定、および『自己の労働によって得られた、いわば個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有は、他人のしかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有によって駆逐される』という規定が与えられていること、また、資本主義の消滅について、『資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される』という規定が与えられていることは、先に触れた通りである。

以上のような規定にたいする宇野の見解をみてみよう。

第一に、本源的蓄積の対象とされるマルクスのいわゆる『自己の労働に基づく私有』に関しては、こう述べている。「労働の対象乃至は場所としての土地は、いうまでもなく『自己の労働に基づく』ものではない。しかも『自己の労働に基づく私有』は、この土地の私有を前提とする。いいかえれば『自己の労働に基づく私有』なるものは決して根源的なものではない。」
「労働は、たしかに人間生活の基礎をなす物質的資料の生産をなすものではあるが、それだけでそれを私有せしめるものではない。」「私有の対象となる生産物は労働によって生産されるにしても、自分の土地で、自分の生産手段によって労働して初めて自分の物になる。」

第二に、この節におけるマルクスの『資本主義的私有』に関する規定については、次のようにその難点が述べられている。「マルクスは、『資本主義的私有』を『自己の労働によって得られた……私有』に対して、『他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく』ものと

して、何か本来のものとはいえない私有であるかの如くにいつているが、資本にとって『他人の……労働の搾取』も、已に商品として買入れた労働力の使用価値としての『労働の搾取』であって、単に『他人の……労働の搾取』というてすませるものではない。『形式的には自由な労働の搾取』という場合、それは実質的に旧社会の支配服従関係からの『自由』を意味するものであって、もはや直接的な『他人の……労働の搾取』ではない。」

このような難点の指摘に続けて、宇野は私有制に関する自己の見解を述べている。「資本の原始的蓄積は、農民からの土地の収奪によって無産労働者を大量的に造り出すことにその歴史的意義を有しているといつてよいが、それはまた同時に中世的封建的土地所有を解消して土地の近代的私有を確保し、資本主義社会として私有制を全面的に確立せしめるものにほかならなかった。『資本主義的私有』こそ私有制の本質を示すものである。」またより詳細にこうも述べている。「元来、『自己の労働に基づく個人的な私有』なるものが、実は自分の労働にもとづかない土地の私有を前提としているのであって、資本主義は、土地によって代表される、制限せられていて独占せられうる自然力を、一応その体制の外において初めて私有制を全面的に展開することができたのであった。しかもそれはまた他の生産手段についても、その直接の生産者との結合を切り離し、これに資本形態を与えうるものにすることによって行なわれたのであった。それと同時に私有制なるものは、それを前提とする商品経済的な売買、貸借関係自身によって確保されるのであって、……資本が、借入れた土地で、生産手段と共に商品として買入れた労働力の使用価値としての労働によって

生産された生産物を自己の生産物として私有するということは、いわば首尾一貫した私有制のあらわれにほかならない。したがって『資本主義的私有』なるものは、本来『自己の労働に基づく』ものとしての『個人的私有』の『否定』をなすというよりは、私有制自身の完成をなすものである。」

第三に、以上のような理解の上に立つて、この節の締め括りともいふべき『否定の否定』の論理について、宇野は自己の見解をこう表明する。「マルクスのいわゆる 否定の 否定も、共有制を否定した私有制を否定するものとしてこそ、否定の否定をなすものといつてよい。もっとも第一の否定の過程は、私有の滲透、発展として、種々なる社会を通して展開されたのであって、中世封建社会を否定する資本主義社会においてその完成を見たのである。同時にまた資本主義社会の否定は、単純に資本家的商品経済を否定するというだけでなく、マルクスのいわゆる〈人間社会の前史〉を終ることになる。……かくてマルクスのいわゆる『否定の否定』は、『資本主義時代の成果を基礎とする個別的所有を再興する』ものとはいつてよいだろうが、それは単に『自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定』に対する『否定』ではない。歴史的にもっと重要な『否定』をなすものといふべきであろう。」

この部分の最後に、『第一の否定』と『否定の否定』との根本的差異に関する次のような指摘がなされている。「もっと根本的に重要なことは、第一の否定が、その変革の歴史的意義を科学的には明確にされないまま行なわれたのに反して、第二の否定は、必ず科学的社会主義として行なわれるという点である。」

マルクスのいう『第一の否定』および『否定

の否定』の論理に関する宇野の見解は、ほぼ次のように要約できるだろう。『自己の労働に基づく私有』という概念は極めて不正確で、そのままでは成立しえない。『他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく資本主義的私有』という概念もなお不正確でそのままでは意味をなし難い。私有制は、「商品経済的な売買、貸借関係自身によって確保される」のであり、徹頭徹尾商品経済化した状態——直接生産者たる農民と土地との原生的結合と経済外強制による彼らの土地への緊縛との二事項の解除、および土地私有権の設定による無主地の解消による労働力商品化の機構確立の前提条件の創出を出発点とする——への接近とともに「全面的に展開」される。こうして、「資本主義は、土地によって代表される、制限せられていて独占せられる自然力を、一応その体制の外において初めて私有制を全面的に展開することができた」とすれば、「資本が、借入れた土地で、生産手段と共に商品として買入れた労働力の使用価値としての労働によって生産された生産物を自己の生産物として私有するということは、いわば首尾一貫した私有制のあらわれにほかならない」といえる。かくて、『資本主義的私有』こそ、「私有制の本質」を示すものであり、「私有制の完成」をなすものである。そうであれば、私有制の問題は、すぐれて資本主義の問題として、資本・賃労働関係を軸とした資本主義的生産関係との関連において、とりあげられなければならない。しかるに、この節におけるマルクスの把握のように、資本主義的生産関係との関連が看過されているばあいには、いわゆる『否定の否定』も、生産手段や生産物の私有の否定に限定されることになり、その結果としての社会主義も、社会的生産に適應した社会的所有だけの問

題になってしまって、生産関係自身が商品形態によって処理されていること（労働力商品化を基礎として商品によって商品が生産されていること）に基づく資本主義の真実の矛盾の解決は問題の焦点からはずれる傾きが生まれるのではないか。

7.

宇野は、別の文章（「マルクス主義哲学と経済学——矛盾と運動」）において、このマルクスの『否定の否定』の論理の展開の底流にある方法論に関して、次のような見解を述べている。

「この第一の『否定』は、マルクス自身も明らかにしているように、封建制度の崩壊に基づく『一連の暴力的方法を包括する』いわゆる資本の原始的蓄積の過程をなすものであって、単純に自己の労働に基づく個別的な私有の『否定』という抽象的規定をもって片付けるわけにはゆかない。また第二の『否定』も同様に、『一種の自然過程の必然性をもって産み出』されるものとしても、それは経済学の原理論的規定の内に明らかにされる資本主義社会としての経済過程自身から展開されるものではない。第一の否定と共に第二の否定も、社会的変革の過程として明らかにされなければならない。それは経済学の原理論によっても、また段階論的規定によっても、さらにまた現状分析自身によってもその必然性を与えられるものではない。そこにまた実践運動の意義がある。恐慌の必然性ならば原理論で明らかにされる法則をもって『一種の自然過程の必然性』を有するものともいえるであろうが、戦争の必然性となると、段階論的に展開される帝国主義論によって解明されると共に、それはもはや原理論で解明される恐慌の必

然性と同じような、いわば『自然過程の必然性』をもって展開されるものとはいえなくなる。革命の必然性はさらに一層そういう『自然過程の必然性』をもって片付けえないものとしなければならないであろう。それは特に歴史的な必然性として実践活動の内に実証されるものとなるわけである。勿論、恐慌も単なる『自然過程の必然性』をもってあらわれるわけではない。戦争、革命と共に歴史的過程の必然性をなすものとして解明されなければならないのであるが、その間の相違を明らかとすることが重要なのである⁷⁾。

この文章の核心は、第二の『否定』つまり社会主義革命について、「歴史的な必然性として実践活動の内に実証されるものとなる」のであって、「それは経済学の原理論によっても、また段階論的規定によっても、さらにまた現状分析自身によってもその必然性を与えられるものではない。そこにまた実践運動の意義がある」

(傍線は引用者)として、実践運動の独自の意義に注意を喚起したところにあると考えられる。すぐ上にみたように、第二の『否定』としての社会主義革命が、「その変革の歴史的意義を科学的に」「明確に」した「科学的社会主義として行なわれる」として、『第一の否定』としての資本の本源蓄積の過程あるいはその過程における政治的画期としての市民革命と、根本的に区別されるのも、その歴史的変革過程における実践運動の役割の特別な意義によるものといわなければならないだろう。社会科学の成果としての科学的理論を利用しつつ、いわゆる戦略・戦術としての実践的理論を築きあげ、未来にたいする投企としての政治的実践を行なう、社会主義運動の前衛組織が担う巨大な役割を看過しては、社会主義革命は問題となりえないとい

うことであろう。

そういう政治的实践と科学的理論との関連を凝視するなかから、社会科学としての経済学の対象についても、理論的次元を異にする重層的領域の存在することが、示唆されることになる。恐慌のように繰り返し現われる現象の必然性は、『資本論』のような資本主義の原理論的規定によってを解明しうる、資本主義の世界史的な発展段階を原理論的規定を基準として明らかにする段階論的規定に依るのでなければ、戦争——いうまでもなくここでは第一次世界大戦のようないわゆる帝国主義戦争——のような資本主義の特定段階に出現する現象の必然性は、解明し得られない、さらに各国のないし世界の資本主義の現状が分析されることが、社会主義革命のための戦略・戦術の樹立の前提として必要とされる、という具合になると考えられる。

なお、宇野のこの文章に関しては、田中菊次によって「宇野説とその批判的検討」と題する批評がなされている。その批評の趣旨は全体にわたって不分明な個所が多く、必ずしも真意の的確な把握をなし得るとは思えないが、ほぼ次のように纏めることが出来よう。

田中は、先に筆者が引用したのとはほとんど同じ範囲を引用する。ただ省略個所が散在するため、その分だけ田中の引用が短い。その引用個所の文意を田中はこう要約する。「教授は、所有法則の転変の問題は、資本主義自体に属する過程ではなく、したがって、もともと、経済学の範囲外にある問題である、とされる。それは教授のいわゆる原理論にも段階論にも現状分析にも属さない課題である。第一の否定における転変は資本の原始的蓄積として、第二の否定における転化は社会主義的変革として、それぞれ、経済学の領域を越えた歴史的な過程であって、その必然性の論証は経済学にとっては、もともと、不可能な課題であるとされているわけである」と。そして、こう批評する。「所有法則の転変は、それが『資本主義社会としての経済過程自身』に属

さないが故に、経済学によっては解明されえない、という教授の論拠に関する疑問である。いいかえれば、資本の生成や消滅の問題は、もともと経済学によっては解明しえないものである、という見地に対する疑問である。……人類社会の一つの歴史的存在としての近代資本主義社会の運動法則を解明する経済学が、その存在自体の発生と発展と消滅、すなわち、その社会的歴史的存在の全体を、その始めと終りとを、把握しえないとすることは、経済学が存在そのもの、あるいは経済学が存在理由そのものと根本的に背馳する、といわなければならない」と。⁸⁾

この田中の要約と批評は、誤読の上に成立しているので、まずその点の訂正が必要である。本文中の引用を参照すれば判明するように、宇野は、第一の否定、第二の否定について、『経済学の原理論的規定の内に明らかにされる資本主義社会としての経済過程自身から展開されるものではない』と言っている。その限りでは、第一の否定、第二の否定ともに、あらゆる国の、あらゆる時代の資本主義の運動を支配する価値法則によって説きうる、いわば原理論的必然性の領域に属さないことを言っているだけであって、例えば第一の否定が、資本主義成立の一般的前提をなすものの、その時期と国際的環境とによって、その実現形態を著しく異にする本源的蓄積として、いわば段階論的必然性の領域の問題として解明の対象となりうることを、否定している訳では決していない。そういう次元の違いを無視して、田中が、「教授は、所有法則の転変の問題は、資本主義自体に属する過程ではなく、したがってもともと、経済学の範囲外にある問題である、とされる」と考えたり、「所有法則の転変は、それが『資本主義社会としての経済過程自身』に属さないが故に、経済学によっては解明されえない、という教授の論拠に関する疑問である」としたりするのは、正確さを欠く理解といわねばならないだろう。

いまひとつの誤読の例は、宇野が「第一の否定と共に第二の否定も、社会的変革の過程として明らかにされなければならない。それは経済学の原理論によっても、また段階論的規定によっても、さらにまた現状分析自身によっても、その必然性を与えられるものではない」と述べている個所に関してみられる。田中は、「それは」の指示するものとして、「第一の否定」、「第二の否定」双方を考えて、「それは、教授のいわゆる原理論にも段階論にも現状分析にも

属さない課題である」と理解したり、「資本の生成や消滅の問題は、もともと経済学によっては解明しえないものである、という見地に対する疑問」を抱いたり、するのである。確かに上の記述における「それは」は、「第二の否定」だけを指すのか、「第一の否定」「第二の否定」双方を指すのか、判然としない面がある。しかし、上に引用した記述に直ぐ続けて「そこにまた実践運動の意義がある」と述べられているのを考慮に入れるならば、ここでの主題が「第二の否定」つまり社会主義的変革にはかならないことが明らかになる。本文にも触れたように、「第一の否定」に対して「第二の否定」を根本的に区別するものとして、実践運動の特別の意義を強調するところに、宇野のこの問題に関する主張の重要な特色が見出されるのだから。そうであるならば、宇野が「経済学の原理論によっても、また段階論的規定によっても、さらにまた現状分析自身によっても、その必然性を与えられるものではない」としているのは、「第二の否定」つまり社会主義的変革に関してであると、いわねばならない。

「第二の否定」つまり社会主義的変革は、資本主義という経済過程の特殊歴史的形態を廃棄することを目的とする、経済過程の外から加えられる政治行動によって実現されねばならないものであり、政治的実践集団の主体的領導の如何を抜きにしては成否が決められないものである。したがって、経済学によって「その必然性を与えられるものではない」、つまり必ずそうあるべきことが説明されるものではない、というのは、いわば理の当然を述べたにすぎない、といえよう。その点を無視して、田中が、「近代資本主義社会の運動法則を解明する経済学が、その存在自体の……消滅」「終り」を「把握しえないとすることは、経済学が存在そのもの、あるいは経済学が存在理由そのものと根本的に背馳する、といわなければならない」と言うとき、そこには論者の洞察力を欠く理解があるといわねばならないであろう。

「把握」とか「解明」とかの言葉の内容に如何なる意味を盛り込むかという点と関連するが、宇野が「必然性を与えられるものではない」と言う内容と、田中が「解明しえない」あるいは「把握しえない」と言う内容とは、必ずしも合致しない。宇野の方がより狭く、田中の方がより広い。したがって、「必然性を与えられるものではない」と言っても、それは、資本主義の消滅なり社会主義の成立なりの

問題の「解明」や「把握」について、経済学が全く無力であるとか全く無縁であると言っているわけではない。その詳細は、後の本文において触れる通りであるが、田中が批評の対象とした宇野の著作中にある次のような文章によってもその要領の一半は明らかになる。「経済学の原理……は、しかし実践活動には何等の役にもたたないものであるというのではない。段階論や現状分析の基準として、それこそ社会科学としての重要な役割を果すのであるが、そればかりではない。資本主義社会の運動法則を明らかにすることによって、その成立の特殊の根拠を他の社会と区別して歴史的に明らかにし、それによって社会主義的主張を科学的に根拠づけることになるのであって、いわゆる科学的社會主義を成立せしめるわけである。……この抽象的規定こそ社會主義の原理として、その具体的な実現に対してその基準を与えるものとなるのである。」⁹⁾

8.

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を吟味し解析してきた宇野は、最後に、そこでの検討の結果に依拠して、社会主義と科学との関係（ここでは、いうまでもなく、この論文の表題でもある「社会主義と経済学」の関係）の解明に向かうことになる。

第一に、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の論理展開における方法的立場に対して、否定的評価がなされる。すなわち、こうである。「経済学の確立は唯物史観を科学的に基礎づけるものと私も思うのであるが、しかしそれは、マルクスがこの節でやっているように、社会の変革の過程自身を原理的に展開するということによってではない。そういう企ては、マルクスをもってしても成功するものではない。そればかりではない、経済学の原理論の展開自身にも障害をなすことになる。経済学にしても、原理となれば、それは永久に繰り返すかの如くにして説くよりほかに方法はない。この原理を否定する新しい原理をもその原理そのものから展開する

わけにはゆかない。資本主義が歴史的なものであるからといって、それを支配する価値法則を歴史的に変化するものとして説くわけにはゆかない。価値法則を否定するものを価値法則自身から展開するわけにはゆかない」。

ふたつの論拠が、宇野の、資本主義の発生・発展・消滅の過程を原理的に説くことはできないという主張を支えている。ひとつには、「資本主義が発生し、発展し、消滅するという過程は、経済学の論理の展開に見られるような、単なる商品経済の発展過程ではない」という問題がある。そこから、「それは原理の展開の過程で、例えば商品から貨幣を展開し、貨幣から資本を展開するということと一様に考えるものではない」ということになるわけである。より積極的に資本主義の発生・発展・消滅の過程を考えてみると、「旧来の他の社会構成の内部への商品経済の滲透として、同時にまた旧社会の崩壊として発生するのであり、その発展は、この旧社会の残滓を資本家的商品経済によって解消してゆく過程にはかならない。しかもまたこの発展は、マルクスが考えたように、どこまでも純化傾向を続けるというものではなかった。イギリスにおける資本主義の発生・発展に続いて他の諸国も漸次に資本主義化し、それもイギリスにおける発展の成果を輸入して資本主義化するためにその発生、発展の過程はイギリスの場合と著しく異なった様相を示すことになる。そればかりではない。特定産業における固定資本の巨大化と株式会社制度の普及とは、資本主義の性格そのものをも新しくすることになるのであった。この関連は、資本主義の消滅過程をも極めて複雑なものにするのである。」

ふたつには、資本主義の消滅過程が「経済過程の資本主義としての特殊歴史的形態を廃棄す

るという、むしろ経済過程の外から加えられる政治的行動によって実現される」という問題がある。多少詳しく言えば、「元々、社会革命は、資本主義社会で発展した生産力と生産関係との矛盾を解決するものとして出現するものには相違ないが、しかしそれはその矛盾を根本的に解決するものとして、その矛盾の発現の根拠そのものを解消することを目的とする運動によって初めて実現するのである。それは恐慌現象のようにいわば単なる経済的行動によって実現されるものではない。」したがって資本主義の消滅過程＝社会革命過程は、「恐慌現象のように経済学の原理でその必然性を明らかにされるというものではないのである」といわねばならない。

第二に、こうして社会主義的変革の必然性を原理的には展開しえられないとするならば、それでは、経済学は社会主義的変革に如何に役立てられるべきか、宇野の積極的提言が述べられる。この叙述も、二重の構成になっている。

ひとつには、「経済学の原理は、唯物史観にいわゆる上部構造に対する現実の土台としての経済的機構を明らかにすると共に、その変革を目的とする社会主義にその変革の対象を、一般的にはあるが、明らかにすることになる」という意義がある。

「経済学の原理的規定は、資本主義の発展の諸段階はもちろんのこと、あらゆる歴史的社会に通ずる経済の原則を、その特殊歴史的形態の下に明らかにするのである。それは従来の歴史において、何らかの力によって多かれ少なかれ盲目的に支配せられてきた経済生活を、自主的に規定してゆこうとする社会主義に対して、その根拠を示すものといつてよい。しかしそれは経済学の明らかにする商品経済の法則を技術的に

利用して実現されるということを意味するものではない。そういう法則性の根元をなす商品形態を廃棄して、経済原則そのものを自主的に実行しようというものであって、社会主義にとっては、かかる廃棄が如何なる線を基軸として行なわれなければならぬかを示されるという点に帰着する」ことになる。したがって、それは「社会主義にとっても、その変革の対象を一般的に規定するものとして、それを科学的に基礎づけるのであって、それは当然のことであるが、個々の国々の、それぞれ異なった時期の、種々異なった事情にある社会主義運動に直ちに役立つというような実際の指針を与えるものではない」のである。これが、政治的实践にたいする経済学のいわば積極的効用であるといえよう。

ふたつには、「運動のいわゆる戦略、戦術は、運動自身の内に決定されなければならない。科学的なる現状分析は、かかる戦略、戦術においていわば無用の誤りをできうる限り避けるということに役立てられる」という意義がある。

上に触れたように、経済学の原理的規定はそのままでは、実際の指針として役立つものではなかった。「しかしまた個々の国々のそれぞれ異なった時期の資本主義の発展も、この一般的原理を基準としないで解明されるものではなく、実際の運動も、かかる原理を基準とする科学的解明を、その基盤として利用せざるをえないのである。ただこの実際運動に直接に利用される現状分析は、資本主義がその発展の段階によって必ずしも資本主義的に純化する傾向にあるとはいえないのであって、原理論だけでなく、私のいわゆる段階論を媒介にして行なわれなければならない。」宇野は実践運動にたいして経済学をこのように位置づける。これが、政治的

実践にたいする経済学のいわば消極的効用である、といえよう。

- 1) 宇野弘蔵『社会科学の根本問題』, 1966年刊, 181—200頁。特記しないかぎり引用はすべてこの個所からである。なお、宇野の引用中にある第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の章句は、すべて本文340—342頁のそれに改変した。全く技術上の理由からである。
- 2) 唯物史観と経済学との関係については、宇野弘蔵「経済学と唯物史観——経済学方法論覚え書」1949年（前掲『社会科学の根本問題』所収）、同「経済学と唯物史観」（『経済学方法論』所収）を参照。
- 3) 宇野弘蔵『経済学方法論』, 1962年刊, 2頁。

- 4) 「マルクス主義とは何か」, 1965年, （前掲『社会科学の根本問題』所収）202頁。
- 5) 「修正派ベルンシュタインの主張に対するカウツキーの正統派的反駁について」（前掲『経済学方法論』所収）75頁。
- 6) 同書, 71頁, 72頁, 70頁。
- 7) 「マルクス主義哲学と経済学——矛盾と運動」（前掲『経済学方法論』, 所収）144頁。
- 8) 田中菊次「『資本論』の論理」, 1972年刊, 66—70頁。
- 9) 前掲『経済学方法論』58—9頁。

1977. 2. 15 初稿

1977. 4. 20 補筆